掌中俳諧季寄便覽

谷口雅春 邨瀧輯

芭蕉翁
俳諧
七部集

音色 流行 書籍

俳諧七部集

掌中俳書便覽

谷壮太郎編輯

東京書林 同盟書房藏

村上鐫

掌中秘諸季考夜覽序

易曰一陰一陽謂之道繼之者善也成之者性也世態人事
未必常上而必變者也天子察之爲祝變於是乃變之不能拘也曰天
子出時又曰天子觀變察士分不能中祝之能變之而能拘乎
小人中就事以察世態之業亦必不然未女統紙好尚陰人体裁時
變況其能之固分庶庶中未失人所通要舍雖素生所所係者情感
以爲新者猶之考季考夜覽生將自擇要但一時之雖故者必爲通係
之編雖後之先附之以資勤學方將在通正反覆如採六藝之業所
故中常之所有彼拘上者必以俗世日所人而者上者不變感矣季考之六
費自之一体中芭蕉翁以來競於生宵者無所得而然不得生夜中之復
案友以雖爲出倪紙季考之一部別世之費自人所以爲與題所得如
時勢變者之得藝圖者中間領業之以贈之云
的信十月之二年冬十二月

張氏

凡例

一此篇は於歌を四時に分ち四季の自序及びは自注を加へ季節の配序
なく注釈を用ひ雅俗を他神代物語なく注釈を所注歌名い今昔せくよ之を華
を以て世を忘れ志を初学童蒙の為より情く見識を為せしめんとす
一雑注は於は一首の式より百歌七十二俗四十四五十歌の仮原戈を経て巻尾に一つ物
表八句句叢句去三句より五七句去一首百注物より一首表句の物人倫なる物折合
別以去及於々の四季切句点俗句西撰以ろはまを於業を他神祇雑を以五季雅
の於ふ点る点まし〳〵注釈を加へ今之を残さるを
一巻中に西を示し〳〵古今に於ふ点〳〵今日に甘き者或い者少〳〵来ざ脱ふ凡
ざる者を残さく記し〳〵以て後進の修ひを補く
一行御物集内を年代名所名物い句論雅人称称の句西まで照ず之を著さを
一標中芭蕉翁の古歌集を物録し〳〵句化の例ふ付ふ
一前注は後俗ふは三俗も必要の句を省略して載せを人倫の一助とを

編者識

心足身
常閑

聽雨寫

芭蕉翁 俳諧七部集

発句日

暁元とくこの戸たゝきする人

熱田社頭にて

さわらしくなりゆく社頭の松の姿

みえそめしより社のかゝり

垂五の枝折おける手満寺

ちりのきに花ちりけるの庭

ふるを打るひ出侍る

二月十八日

春やくれ人さ月に社伊勢参り　芭蕉

掌中俳諧季寄便覽

東京　谷　壮太郎編輯

○春の部

○春

春の嶺之勅きて生ぜる之春の時之ちるの
あるく文を春の弦なり草木の芽のもえ

左暉　勾芒　蒼天　春の天　朱君　青陽

部光　媚京　部京　上春　春の初

一月

夜の宮也もろく正月とも云ふ　あれを地正と云ふ　周ハ子也
もつく正月とも云ふ　天正と云ふ　一月也もろく正月也
まること　虞より　夏に春のり　舜の正月也　汎て殷也

又祖にうけ　とい　ふ　故　ゴ　改月　と　あらため　て　正月　と　も　蓋　その　諱　と
さぐる　なり

睦月　むつ　ミ　の略　**玉表月**　表　玉の　正月　**左簇**　**玉表**

大寒の後十六日　**雨水**　玉表の後十六日　**盃表**　**瓶月**
氷　良に　達　ふ　氷　良に　さ　ま　ふ

裏正　**左辰月**　一年の　が　ら　ら　なまり　ハ　ル　ル　**初寅月**　**霞**　**初月**

弟端月　**弟**　**新月**　**初表月**　**早稼月**　**元初**

三初　**元三**　**元日**　**屠蘇**　**四方拝**

元日寅の一天を上清大辰の赤垂を出御房星と唱へ天地四方の山陵を遥拝し奉り初めて年号を
さらひ宮殿をも祈りつかまつることなり四方あり乃
ち　ま　ず　ま　ず　て　寛平二年の御記に見えたり

元旦　**歯固**　**改旦**　**雪節**　**年始**　**年改**

改年　**南年**　**千代の表**　**御代乃表**

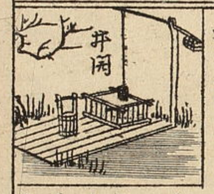
若ゞ表　**四方礼表**　**花乃表**　**若礼表**

けふの表　**たつ表**　**日乃初**　**年の花**　**若き年**

新玉礼表　**年立加ゝる**　**初拝**　初賀　奏祝　奏祝　辞令　天子を元旦あるを　拝せ　たてまつる

腰赤穀　腰　赤　穀　把後の国より　天子出花舎に　供　たてまつる　**氷の様**

元旦氷をまるあつき時い　年うまき時い四年とも　ふへらをまろり　張　**井閑**　**屠蘇**　いまゞかせざるか　よなかをしらず天　元旦氷　花あ　とう氷
ひも　祝ふ　なり

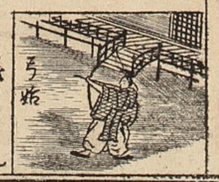


今年はさいさきよく世の中の人の心もうるはしく
穂蓼生ふ穂を積おほ倉なり
赤ゑを積の名によれる月
年社内造 付にかける面の書に
約束あるべし出来あるべし
雨りなるべきもの雨りなるべきもの
約瓶にとらを二人しるすけ
世にいのぬ房俗る年をとり
死去にすらん暁嶮の苣畑
以く表ぜ苣と赤とに以をうく
寄もうんも多くとりにあく
三月六日雲を寄るて

いふ 岡柄笛 クズ人和花者習の公民岡柄の奏年始る笛と奏をとなり
祇園制掛 元旦宮の別る祇園なり 年徳神 年神
年柄 稲竭 東方柄 掛朝 稲葉
年男 泡速佛 庭窯 東方 初がらを
歯柔 棕 数乃子 かんと祝 俵子
初かをみ 田祇 歯がくら 大阪
にし青 初空 穂長 筵脈 合穂 左箸
裏白 開き豆 初暦 門松 門松 柿

なら板や畑うつ山の八重さくら 豆茶
れりしろうの手むうとしの穂 里水
巻の豚苔性ろくん袴若て 荷芋
いきくべき法ゑ なのるく 戦人
松屋にたゑ世ぬなの係の蔵 湖笠
変ぜとしるる生きめつ月 執芋
笠白きを素堅色にろう 里水
菊ろる頃よいまみをおく 豆茶
表町四つ二人飯利ん 戦人
唐ゆのに ろるまやくきみ 荷芋
頓反を大徒の演に入ろう 豆茶
伺やらやん我世の 戦人

かきう炭 ぐざう竹 書初 古出 試筆 初 初硯 暦開 雑煮
稲ぜうう 大ぐさう 大拍 羊羹 蓬莱 海老 うち柔 うき 物
くし貝 ぜんぜび 元日に 元日に
これらを祝ふとまもいに元日に
みりん 大の〆 木 沸隆 元日の雨 稲積 元日のひる
佛ふといへば来日に せいふ 森なり
以れ何ぐる 元れの森覚に 稲素叫 元日叫 たのら祝 筵元日に 来に十二月に
き筵 初 苦衣と若 初る なり 初菱 弓始 的 射 万茶



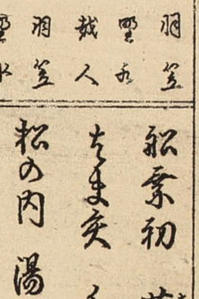
稲びき 猫初 若名ひも ひろ脈
金引 大恵素 素きぐめ 名ひも茶
球打 稲きそう 振く 球 ものなり 孫 ひき 孫 の

松原の面もまつりの日なれば、やこのうへ
蓬ふき、ちまき、万日はさらら
里人に蓬をあたまにかけ、
角なきを張り重石おく、猪
あるひ、こるの木の根を蓬に結ばん
酒をせるをさる法角乃山
井水にけ、や筑紫の故伊勢の年
内侍はえらん代々の扇は岡
物にかけり、家は中いかつきに
名くのち栗と蕨中上げ
大きゆ今仲々あるえひ手柄
りはおあ、要我にとき体あり

羽笠
雲水
越人
羽笠
雲水
豆菜
越人
荷芋
羽笠
雲水
豆菜
越人
荷芋
羽笠
雲水
豆菜
越人
荷芋
羽笠

初夕の茶は、あに物花うるて
まさに廿日もやき麦乃粉
一枚かる者いるの人なる色や
おい視まろるきもの、自
筋実は日の元はうなる夫婦を
麦面稲よ内家はたく
四七物を茶をる里に生ろう
力は筋をつきし中の
徳やこ年の末ものの節うに
言ひく法みは重の山
元つけうり廿九日の角さぶみ
男のつとめまおふみ

紅茶初　葩蕉　積廻し　松雑　ちまき
ちまき交　永祝　麦粉　吹初　香遠　店卸
松の内　湯殿初　麦永　節振茶　ぬひ初
紅玉祭　弓柔初　初浴　羽子板　羽子　羽つく
競開　六日年城　二ヶ日　若菜摘　おぐるむ　花開
七種　菜　蔵蒲茶　蔡菱　仏庵　うぶ初
二夫ノ大答　二の夫ノとの茶夫中　きつ買
懸想文　面赤まて初表に巻〳〵の絵文と対して
うる なり年中の表のまつりをたふ



元始祭　三日　改始　四日　叙位　八日　女叙位　八日
陸軍始　八日　沢軍始　女王祿　八日　除目
射礼　御歌始　十八日　縣召　卯杖　初卯の日　桃柳
切禁中くまるまるまの枝
城べきは枝とそ結ふすこ
る年なるにあやうらん　初子北日　子の日北あそびわ松ひき
この統義なるべし　子ハかの方角ゆ人参命

初寅の日　鞍始　初卯まつり
任居　叙井戸　警蹕　左宰府　叙井戸　夷祭　十　摂津の国面の宮
初琴　年始　十日　居貞祭　九　摂津の国面の宮　夷祭の前宮之
初茶　仲八日　常陸常の神事　乗しまの祭之　女乃あるふ人

二月十六日 豆菜の国家にとまりて
住おきを聞てのしき森見られ 豆菜
新に河くるまるさめ法 豆菜
藤寿る岩水の奥き寄のうて 越人
まりしく人をみくるるのの子 荷兮
立てのる俗し法永の自移に 重文
芋の種を摺る幸の 端 執筆
嚴きをに花隠兎の猪共集て 豆菜
岩共河ひより蕎見ゆる里 野水
初の日を蹴蹴やらん 烟さ川 荷兮
ひくるきるるき紫の一門に 越人
為しる 坊さい住まに接みて 野水

枝多ある時その男ども法師を寄法華に来るゝ 水無に
おきてのれ にうらぐくりなる華の石まを文にさだまるなり
初演劇 男踏歌 十四日 あらまをぐ 左義長 十五日 江
爆竹 ばうやくなり 除閑 十一日 徳引 十四日 粥占 十六日
ころまき 十一日 百度菊を 立龍灯 十一日 樹木の呪なり 粥杖
清蕨 大角へ来る 御忌 十六日 まり 廿六日 法会 上元日
ちのさに 男と 女の際を 浄土宗の法会
十六日 小豆粥祝 二月日 三保薬 月日 猪弓 十八日
と 弓場殿 天子 ちと 御覧なり やぶ入 二十日 俗は 藪入又 奢文と
玄 藪入 奢文 不 破の字 二句去 位 有りの数 左神薬 十九日 八幡へ 薬 して 藤
武将 木のれと 求 為

解 雪 松 奢文
々雪い 文 ちと
月十九日 荷兮 重 文
吳 け 菊 ゆ
花 和 名 に 加 る 越人
初 為 新 に み つ ろ 豆菜
別 社 自 に 為 み 荷兮
法 花 四 社 寄 よ り い 世 豆菜
妻 ゆ く 芭 乃 笠 も 加 し 野水
永 き ロ ち 々 能 な 此 日 る 荷兮
簑 為 る 尊 生 る 五 自 為 の 中 越人
紙 路 の 紙 に 河 り て 来 い な く 野水

初天神 廿八日 吉田清稜 廿九日 初不動 廿八日
遊行札切 正月十六日 一寺の札を一日 押仕 四 仕 日 押 る 札 裏 書 了 寺 中
あ り き い ふ
闘鶏祭 十六日 七月十六日 絵踏 十六日 一月十六日 三月 絵踏
梅 六 花 長 の 字 入 て 八 雪解 雪 き ひ る 雪 家 雪
ら ら 梅 梅 文 木 絵 踏 梅 庭 梅 梅 紅 梅 柳 川 や き
風 見 家 柳 柳 綾 柳 柳 柳

義茅　初茅　新茅　白茅　うつる　竹

海苔　まのり　あまのり

かおのり　さくらより　ふきのり　のり　ふね　のり　ふる

山葵　ふ山　茶木茶

めうがの　ぜんまい　さる　きくらげ　体　ぜんまい

白尾　滝尾　初蕨　海ノ山

糸遊　陽炎　糸ゆふ

風光　陽氣の　ちらつく　いろ　ふく　風　あり

百千多　角くむ

芦　玉江　葭　わしの　芦　葦

蕗　栗の芽　茶　五多

蒲　蓮の根掘　多多　茶かしら　猫さかる

猫の書　猫恋　水ぬるむ　田とまく

逸加

三月十九日　永泉寺

山人のあるき　園社　つ　逸　あり

探　ゆ　ゆみ　に　ある　茶　し

きちりきや　解　晒　べき　雲　ゆ　て

り　者　め　く　め　に　流　ふ　出　茶

新　日　を　賀　り　つ　雑　俗　の　つ　の　あ　し　く

有　な　き　雲　の　い　を　ゆ　く　ゆ　寺

茶

昌　陸　社　松　と　仁　茶　ぬ　唐　代　の　茶

元　日　社　永　の　百　乃　競　言　乃　寺　し

初　茶　の　を　里　牛　社　な　き　日　う　あ

け　き　の　茶　歯　い　た　と　ゆ　り　麦　乃　京

い　い　れ　茶　菜　園　の　雲　さ　れ　し

理　社　茶　る　み　海　の　冨　く　梅　白　し

城人

永泉

雑雲

森鶯

荷芋

軌筆

利雲

重五

昌達

雨相

永泉

羽笠

茅花　胡大根　若和布　木乃芽

畑打　菜　烏芽　きかいし　雑菜摘　藻

長閑　三月　菜芽　蛾ゞ萩　魚氷ゆ登る

鞦韆　祭る　水和　多躰　菠薐　氷解　猶活　凍解

暖　遅日　除雲　蒼雲　鶏鳴　朝餐　悦惻　児花

雲雀　揚雲雀　鶯　鳴多　海雲雀　白魚

表菊　畑返　蒼菜　菫　優　芹　茅

椿　古代い花椿と　せきれい　雑　尚時椿と　たのうる　表　元

烏芽　ふきの芽　蕗

永〳〵拙ハ松ハ雲の結ぶ けふ
霞の人数社外雲に[illegible]
摘てこの春元日里の極望の[illegible]
星まち〳〵[illegible]先の四方の[illegible]
〻ふ〻〻〻も小松原ちん年の[illegible]
[illegible]日二分柳のうゑく匂ふ[illegible]
[illegible]〻雲の朱ふくき高[illegible]
芹摘とてあけて海なき新[illegible]
[illegible]れ[illegible]る人の浜へ行[illegible]
[illegible]の[illegible]人[illegible]白壁いやし〻夕[illegible]
古紀や[illegible]発[illegible]
傘[illegible]の[illegible]望の[illegible]
[illegible]や[illegible]摘根〳〵の[illegible]
[illegible]にうつのれて[illegible]

旦菜
社西
栗く
春夜
陸望
荷号
日
旦菜
城人
芭蕉
重五
長湖
城人

[illegible]に摘て西る[illegible]
ふり[illegible]る[illegible]
板本[illegible]

[illegible]

社園
李風
荷号

[illegible]の[illegible]
山畑[illegible]
[illegible]

夏

[illegible]の[illegible]の尾い[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

九白
李風
城人
社園
長湖

[illegible]

二月

仲春 [illegible]

椒 椒を採る人多し 東風 風和 春の風 茅蔦 芽生 膏雨 春の雨 酿 [illegible]

防風 種物 今年 去る年 去なりぬ 春去る

春麻氣 春うけそと云ふなり

夾鐘 警蟄 雨水の後十五日 和甲ハ速と云 春分 警蟄の後十五日 斗柄ハ速と

つゆ九十日の中ハ春ハ[illegible]
分と[illegible]

仲春 令月 陽中

如月 梅花月 小草生月 初花月 衣更着

[illegible]の如く文ハ又 中和の節 一日
[illegible]ハ[illegible]ふ 赤飯 吉祥の
初午 稲荷祭 赤飯 [illegible]
ハ[illegible]

解くだり 一日 春日祭 上巳 水日祭 初午 行

重祭 二日 遺教経 九日 乙乗会 十八日 桂炬火

良八講 八日 祇園八講 日 浅日祭 廿日 小豆

沛辰 廿八日 道明寺 日 踊念仏 時宗 治聾酒

十五日 [illegible]

初午

社日ハ[illegible]
耳の[illegible]
日[illegible]

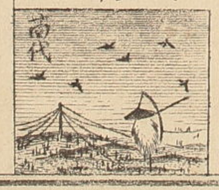
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二月堂の行 一日より十五日まで 坐禅ハ[illegible]
[illegible]井戸あり 汐ひの

献生子 彼日[illegible]
[illegible]五穀の種を入[illegible]

釈奠 二月上丁日春秋両度有後奠釈菜 八月下丁日文宣王孔夫子を祭る也 **別見** 十一日公卿殿上小祀云々 **社日** 春分秋分後の戊日 **芝能** 七日より十四日まで **涅槃会** 十五日釈尊の像仏のおれ **彼岸** 中日より三日の間西方浄土に往生 **積塔** 十六日聖徳法師仏像を光孝日天皇の皇女の忌日 **出羽** 新米古米清酒 **初雷**

燕 丈夫つばくらめ乙女の栄 **蛇穴を出る** 地虫 **桂** 月の桂 **虎杖** さのさぶま **蕨** 紫蕨 **焼野** 畑やく 山やく **水葱** 花 **菜の花** 菊の花 **苗代** 田 **厂** 厂の名 **蜂** 我蜂 **松** 里の子 **蒸鰈** 鯡田 **堰** 力 **菜** 菜 **忙** 苗代



冬

ちいめれ水い夕日の村ちくれ　杜国

芭蕉箱を霜しく物ずく

霜ずきき抜藤は数度をきせ中　大伯任如行

雪ばもら蕪ばなめもきぶ　昌碧

ちをさ人あのある雪のしらぶ　芭蕉

ゆ悦の煙大数きき雪のくれ　城人

芭蕉箱をおくずてをの時

お弟子の水ふみ引る石ぶ　杜国

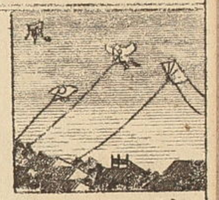
原士に炉ある宮をまうけく

ひらしき業袋ひらしを籠　荷兮

真享三丙寅孝仲秋下浣

冬於日

笠ハ古逢の雨ま所ろ家衣ち



彼岸桜　初花　初桜　花彷　かつら茶

蘭公　菜の花　枝菜　茶菜　薑まく

大根の花　仁ちぶ大の花　五加木　物妃

銀杏の花　物脊　接木　接穂　麻苗　姑葱

蓮　薤花　蕪蒸　蕪蒸　風巾　二日灸

三月　季春　杜鵑

姑洗　清明　春分の後十五日　穀雨　清明の後十五日

季春　竹秤　病月　春月　禊月　修禊　令辰

とぶ　の　ぶ　ぶ　ぶ

芭蕉　牡丹　荷芍　雪水　牡丹　雪五

芭蕉　牡丹　荷芍　雪水　牡丹　雪五

芭蕉　牡丹　荷芍　雪水　牡丹　雪五

樣　一重樣　八重樣　おそ樣　既さくら　山樣　赤樣　いせ樣　統樣　筒の手樣　うぢ樣　淺黄さくら　福さくら　人丸樣　江戸樣　雪丹さくら　白ひ樣　ふりそ樣　西行樣　てまり樣　庭さくら　ちぢれ樣　光光樣　あや姫樣　法さくら　糸樣　ふげんざくら　美丸茶　きうの谷　嘆性さくら　あさ彩樣　かざくら　不明さくら　墨染樣　布引樣　白うく樣　人樣　花樣　**桃**　桃　桃姫　桃　強桃　けうの花　桃の矢く　**芍藥**　正花はかるる　花の欲に出る　**梅茶樣**　三子代茶　みさぶ茶　十八日　東東　淺草　淺草焼内　うりは　茶むむ　十八日　東東　隅田川の　ある　**淺草樂**　十八日　三社　東京　淺草焼内　ちゆ　みさ　うりは　茶むむ

踊　**踊大念佛**　十八日　**千本念佛**　ちゆ　みさ　うりは　茶むむ

清身拭　十九日　きぐの拭　拭汗　かのるを　拭と云ふ　拭赤梅檀　ある　あぶら出と　俗は汗と云

白紙　いとひ　花の園　のうち　こう　河を　色さの　迷ふ　もとけて　茶を

秋の　一斗の　望つく　未花　秋の

日　茶の　李白の　河に　月を　みて

卯に　本樣　をもき　むに　花色　ちう

うし　社　花　くの　面茶　のるく　きよ

筆よ　鮮の　うを　我ゆく　ふ

茶の　の　河あの　くの　墨茶　むへく

けふ　いの　ゆ　めま　ゆう　にぬく

後ひ　く　志　角ま　志　茶の　花麻　て

庭下い　蘇の　のけ　つく　ふな

おもん　も　壮　ぼ

ぼま　さ　おの　を　樣　き　も

さつ　雪の　あく　も　待き　ての　へる　雪　五

書に　まく　えん　る　蘇　の　食　牡　園

女房　廿一日　**吉野の舎式**　十日　**頃の峰入**　逢のみね　入秋あり

鞦韆　ブラコ、ユサバリ　きく　せんの　たつふ　まま　仙の　我　きと　ぼふ　りあ　くり　そ　皮　もつて　ふご　のや　に　お　くら　へ　花　の　み　の　枝　ち　枝　へつ　く　た　上へ　の　美女　ち　に　四　きら　く　**人麿**

兵　十六日　**沛彩供**　廿一日　**言雄の**　言雄　赤ち

柿のとう　柿　あち　ちきの

こま　ゆ　ゆく　ぬと　**蓮殘**　蓮　ふ　仏て　かき　茶こ　**茂**　ふぢ　ふぢ　な　皮

不　羽　ま　ホ　仏　ら　茂つる　ち　茂　茂の　九　**山次**　歌　冬　**鄭**　白つ　ぶ　仏　戸　つ　ぶ

茂　こ　ぶ　ち　り　茂

壁菊まくらの花の相生草
うつくしみけしとなびきまり
麻苧の月袖は鶯殺せなくらん
桃花をまれる貞信の菊
雨去雲消の田螺ちうう花
更めき伝らきをにかきにおく
麻姫けを知れいにとかる男
孫さまさけ松みは去里く
いもしと寿をちきる力なき
此日いる紀はくびを巴りせん
小三右は金とらせひとつうくび
育いおそのれ杜鵑ぬき人
浪海とのかまいを金壁蔵く
おつ〳〵ぬ社三地花切所
初花社世とあり嫁の里のあしく

芭蕉　荷芋　童五　正平　杜国　壁水　荷芋　芭蕉　壁水　童五　芭蕉　杜国　童五　荷芋　杜国

のふろいくらの玉菊が河内き
橋をこま麻苧の伝ひれのかる
うくひも紀よ寿殺ちりく
孫殺ちく橋い柳社蕃さび
三活ちくんふ破のせき人
童五　芭蕉　杜国　童五　荷芋　壁水　荷芋　芭蕉　辛夷　壁水　荷芋　芭蕉　壁水　童五

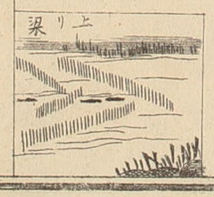
七夕
まがめ玉を壁に金うちにあり
ひとつの社華の下華を さ
芭地は雪のみ迎ふ多まく絶
云まるまつのくら落やくに赤き
月にくくる唐傘の紋の赤松く
点せぬき殺さ伝倫殺ま川
社柳の唐よ殺まく志つのくら
蒜社実つくふ京ほのち里

赤熊つくば　天竺つくば　志のめつくば　まはぬつくば
用山つくば　保山つくば　小式つくば　きちらきつくば
紫雲つくば　姫のつくば　旁殺つくば
伝川つくば　袖つくば　岩殺つくば
琉球つくば　山つくば　岩つくば　けくらの菓

海棠　ねむもる花　からなし
馬酔花　あせび
竹の秋　林檎の花　菜栁　小手毬　木ずの花

菜栁　けまん菓
蘭牡丹とのみ花ハ菊
菜ハ牡丹ホ似くう　委
麦藪　田蔦化て藪と成　田蔦と
田の蔦ふあくび　ひくあき　あいふ　成へ
うころもちあり　合法　梨の花　彩のつまな
茎　連翹　沈丁花　あふのうあ
つぐ　もくれ　もくれ　もん　きやう

木蓮花　辛夷　杏子の花　長春　犬桜
九海棠　楊梅の花　丁子花　通草花
合歓花　末菜　母子草　藤坊の花
合鳳花　素蘭の花　撫花　小米花　五形
小梅の花　仙春萩　百蘭　花ちも　上巳菓
柳菜魚　桜くぐひ　柳蛇　桜貝　桜朝
引鉄鶯　寝の菜　郭公の菜　桜魚　小帖
雲不入　ア　とぞ　呼み者　京迷雲　雲の名称　別き雲

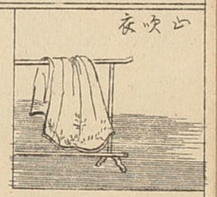


枝もうゑ花をひらき山あけは
ひとりゝ八重咲の白椿の
三ヶ社芭蕉葉尾張の社多家
志ゝ神はさも城の猫居刈

社をひくるに僅は十歩

はゝみのねゝ有とゝ歳を時雨ぶ　杜国
去ぬゝ人ゝみ月ゝ人社はなつま　重五
富原社葉を初猫人の矢は負て　曽水
ふかの色つをわゝ山あけのそる　芭蕉
る雲接くゝ何ふきに冬のあゝ浪　荷兮
葉の海共をゝむ雲への蔦は英　正平
らうたけはおもむ姫の〳〵いきを　重五
鬼茨そゝろなさけそゝらふる　杜国
つゆ莊の赤ま山力を撰を色浪　芭蕉
蕾まきんまゝ篠笑正乃坊　曽水

紅芭蕉みちに住ゝ〳〵さ浪きく　杜国
志の上海社をきゝて雑を作るゝ　荷兮
余郷社葉より米おんとおを　曽水
まのきまを住海のゑゝく遠り　重五
御宮ゝる重藤を付曽　荷兮
縣あるを水花光浪と伊の色て　芭蕉
五形　茎　社　鶏　六　及　杜国
う色ゝを嘶る雲雀ちゝ〳〵　芭蕉
志重の三る社浮ふさかれゝ　曽水
をのを紀也夫制の塔のをきぶ　杜国
左尾社まり　をよみて遠りぬ　荷兮
推〳〵ない柴竹出なのひつゝん　曽水
海日をさむゝ力うる　年　重五
重社粗吳の園の笠めつゝ〳〵　荷兮



山吹衣　さくらかさね　法ゝど衣　大徒雲
八十八夜　三月尽　蓍の表　行表　表白て
表原き　表の限　表の名殘　表の湊
くるを　表は陽る　表を惰　夏近き　夏麻　夏篠

○夏の部

夏　夏い低なり万物を発低して夜を長きるなり
おろいあ月ゝあとあと面ぞ夏いあつゝ
炎帝　祝融　昊天　来明　長嬴　蒸炒

四月

仲呂　五夏　穀雨の後十五日　斗蘂ふさもあり　小満　苛夏

初夏　孟夏　正陽　余月　花月　卯月　卯花月
花名殘月　弦月　更衣　一日　白帝　卯の花衣　下ケ帯　弱双き
一日より是袋をの禁中　まをぶれ　浴
ゝを袋をの後
初鰹　荒麻刈　茶摘　一　弱茶と　近江国坂部荒麻の左荒
日　麻の法　茶花は四月一日より或は初午
より　蓋去の祝い稲倉をつのさどるふ　ちりく
男女　潜をふ　ゝ茶ゝ　茶湯をたき
祝にらてまつる　不幸　ゝて　牡の　あひ　ぶに　茶
とゝ　やむ　と　汚ぞ　ゝて　さらに　婚をる　ものの　二
枚を用ひ　三ゝび　嫁する　去い　三枚　をもちひ　祝者の　後
ふ　供　ゝる　ゝ　祝の　祭　ゝて　女の　男ゝ　ゝる　数ふ　ゝ　ゝて
を　ゝる　ゝ　男　あ　ゝ　ゝる　女い　ゝ　ゝ　ゝて　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

芭蕉
重五
牡丹
雪水
芭蕉
重五
牡丹
荷弓
芭蕉
重五
牡丹
荷弓

八瀬祭

上賀茂の山城国愛宕郡矢背の里小野八瀬の社い天満宮の[illegible]の山麓小野侍へ云菱祭お[illegible]ときは比叡山法性坊の[illegible]に山つく学問[illegible]の往来休息の所小後人社と[illegible]云人祭の日大竹をきりくその枝ゆ[illegible]の面[illegible]竹をくくりつけ[illegible]人あるくと竹[illegible]

神衣祭

十四日 麻績の連と云人あるくとうみ[illegible]雨の菱[illegible]

加茂祭

中酉祭 菱まつりこの日[illegible]法かつら[illegible]

日光祭

十七日 北野祭 上旬

水屋祭

上旬 戒壇院開帳 八日 山門

水屋祭

三日 四日 五日 奈良 春日

菊麻法事

十四日 中将姫 忌日 千回子 十六日 三井寺鬼子母神祭

花供

[illegible]大師の[illegible]忌日 神祭 [illegible]元[illegible]祭 三枝祭 南川祭 [illegible] 古塔会 [illegible]天王寺 松茸渡 [illegible]社

郭公

子規 時鳥 立しき 歌 [illegible] 山鳥 社宇 牡丹 梅 [illegible]

編笠

[illegible]

牡丹

[illegible]

蕨

[illegible]

菖蒲

[illegible]

牡丹

[illegible]

菱

[illegible]

牡丹

[illegible]

雪洞

[illegible]

八[illegible]

[illegible]

菖蒲

[illegible]

牡丹

[illegible]

菱

[illegible]

牡丹

[illegible]

芍葉　及び葉

反木豆　新糖　結び菓　木の下やこ

麦粉　麦の粉　麦饅　ちやせんま

麦の粉　麦の粉　麦の粉

麦の粉　麦の粉　麦の粉

麦の粉　麦の粉　麦の粉

雄遠は烏帽子を被女五三月
庭み水苔付るを五月の落花
なつふのき山猫ゐちくらみん
庭の草と呼ふ家を集河も
江を近く猫朱魔と母を捨て
家内出よ子いおわりなる
たゝ云猫ゐ蕨を立ちち拂
蕨樂四るを花を出て湖ゑ立ちの人を
立食を蕨を出て蕨を
花おうへに花を引鯉を拾ひ
蕨を日進むるを
とに照る家の水魔を
蕨を
蕨子河を小林を立て
蕨園つくゝ

雷水
羽笠
荷弓
芭蕉
重五
牡園
羽笠
雷水
芭蕉
荷弓
牡園
重五
雷水
羽笠
荷弓

五月

蕤賓 芒種 **芒種** 小満の後十五日 **夏至** 芒種の後十五日 午月に進む

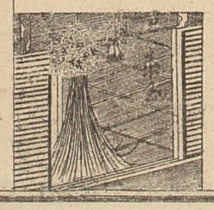
皐月 橘月 **葛月**

端午 艾虎 菖蒲人 赤蓋 夜祓を除魔の例多り **懸艾** 小幡 紙懸 **葛の節供** 菖蒲 菖蒲酒 菖蒲根 菖蒲

粽園月 粽月 **粽日** 粽の日 **菜日** 菖蒲の日 **菜の日** 菖蒲の日 **菜茅** 菖蒲 **百茅と戦** 百茅つる

菜茅 菖蒲 **百茅と戦** 百茅つる

粽射 粽の日 右近の左手つのひた近 のまをつのひ袋末の



格室ゆえをやつを結まり　牡園
祝ゆ恋かせん角い傷　芭蕉
ふゝりゆ格を来の沈波草山　雲水

ひさゆ
江南社祝頃乗ゆひさゆを送遠りあれゆ
を乗ゆを乗ゆを海を乗ゆ〳〵なむ笠ゆを
ゆく〳〵成い大格ゆ色ゆを江南ゆを〳〵れ
と咲るふくへゆも妻ゆを来ゆ後社恵
るゆ〳〵利ふるを〳〵しらをつら〳〵格の
ゆゆを江勝〳〵海やゆ〳〵ゆを〳〵ちに
倫るさゆて〳〵みるに日角ゆ秋きらゆゆ
〳〵て　雲ゆあけれゆ雲乃ゆゆく〳〵きに
かゆ〳〵るを〳〵ゆく〳〵なゆを〳〵ゆを〳〵
きゆ〳〵て　昭風雅ゆ藻恩を江へを〳〵

福の麁を引杉茶と　五月　六月中を五月ゆを　麁末
ひゝりゆ日を〳〵ふゝ　日後をあらをふゆ
祝ゆ遠遠をあらをゆ　市地折　加茂の競る六日
たいむを　ゆ
くらべるきゆひるゆゆきゆ祝を
るをゆを〳〵遠遠をくらゆる　重玉流稽る六日

住居清田植　廿八日　山田清田植日　伊勢山
上

川祭　八月　六月川ゆ〳〵毎年ゆの日船を三ゆ三百　れをらさし
ゆ波ゆを祝頃ゆ祝ゆ　三十三元祝祝ゆ　ゆ
ゆ祝ゆを祝ゆを祝ゆを　と咲ゆ　ゆ
ゆ　廿日清例ゆを清奏ゆ〳〵忘れゆを清奏ゆを〳〵ふゆゆ
日　あゆを祝奏ゆ祝ゆ清奏ゆ祝ゆ清奏ゆ又祝〳〵ゆゆ　ゆ
ゆ　あゆを〳〵ゆ〳〵ゆを〳〵ゆを〳〵ゆを　ゆ
惟子　祝ゆ　辻ゆ花　ゆ深ゆを江花ゆゆ
くゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

元禄三年自　城智城人

元禄元
水社ゆゆに付ゆを鶴を格ゆ祝　菊
ゆ日社ゆゆゆに付ゆゆゆゆゆ　弥欣
城人ゆ乱ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　田水
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　菊
自ゆを祝ゆ祝ゆ力乃鶴　欣
粗面つゆゆ松ゆゆゆゆゆ　水
鶴ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　菊
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　欣
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　水
中ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　菊

涙雨　廿八日　雲月搭薄　清流酒　祇園清奏洗　日の夕　反
黒鴨　羽ぬけ鴨ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　至　六月の中なり　半夏生　反色より十一日目に　六月雨
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　さみだれ　きりきやこ　入梅　梅つゆを梅の雨　青梅　梅つゆ梅なを　席が
ぬえの舌のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　鶏川　鶏ゆゆ鶏ゆゆ鶏ゆゆ　羽ぬけ鳥　法香色をゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
きれゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　憔悴　枝のまつけゆ　鵜飼古と去
かのこゆゆ　麦刈　麦粉麦ゆゆゆ麦切麦ゆゆゆ笠　田植　苗くゆ　田植ゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　紫陽花　霞盃子

[illegible]

硯水　菊硯　水菊

未いちご　茅いちご　早瓜　白瓜　千瓜　浜醤茅　真菰刈　赤摘花　紅の花なり　京茅花　蓍　竹あり　熟瓜　榑　雲花　竹せんざんの花　葛藤　永き根　溜米　つもり　銀花　熟瓜　夏山の蔭に　照射　空中さんさろ　うくもて麻をこえん　入梅松　梅花　梅花　梅雨水赤松あり　狩　むし　穂狩　夏山の蔭に　麻をこえん　入梅　入梅の月　しまるなり　いふまひみて　麻の月をこがせらん　入梅松　梅雨水赤松あり　蒼木焼　入梅　入梅の月　しまるなり　蒼木焼　源をまらん　ためなり　石菖藻の花　楓の木焼　夏菊　夏菊　夏菊　むさしのむ

硯水　菊硯　水菊

硯水　菊硯　水菊

姫の時　仏もものふの会仏　中くに出る仏者は　者はあり　里はなり　物也　くぬ蓮の　杵を英　月花　自然　花まき　きはまり　拍子うら　拍子　唯四方なる　茶毫の　毫　一巻の　経　者の　茶い　花まぬ　かの　花きけい　芽豆　河ゝを　欠　四　花なる　なるの　なるの　菊十二　林檎十二　曲水十二

硯水　菊硯　水菊

硯水　菊硯　水菊

つゝ　ゝの　ゝもあつ　つゝや　茶の　茶　林檎　硯　うゝれて　林の　茶いさめぬる　菊

天蓼

芙竹　藻と刈　藻刈　紅　拡把　天蓼　早松茸　子初茸　萍の花　生姜　菱の花　卜部の花　さるとりの花　青山椒　びやう　北柳　茄子　栗の花　米の実　五月つゝじ　刈葱　茨の花　茶拓　拓　拓　和布　和布　かる　林檎花　紅　露茶　茶　花　葛藤　つぼみ　青小豆　青さゝげ　青田　田茶　栗蔚　百蔚茶　百蔚　茶　紅　紅　紅麻蔚　稗　稗まき

蘭（まゆみ）かいて　拒馬（ぎばし）　若ら豆　牧張（うやつり）　卅

合歓（ねぶ）の花　梔花（くちなし）　藻刈　藤（ふぢ）　あらめ刈

菖蒲（しやうぶ）　ぬかい　五帙（ごちつ）　五鰹（ごかつを）　千鰹（せんかつを）　鮎　蕓（ひゆ）

陀衣（へびさぬぎ）　氷馬　毛虫　蛍の初声　蛍（ほたる）

蛍の美　水雲の菜　鴨の深菜　五弱（ごくいな）

仲の志げ菜くくめ菜　白菜（はくさい）

きへたると云ひくるを白菜と云

六月

清浦奥義抄に云の月暑熱しきたるといふ云なる月の上下を暑せしなりといへり　おの説は考へがたし　云の月ものこと多し　或いは

云云月暑熱をげしくくいかこみ月の係下い泊を云べし

云云の月といふ云どの説い云ホ泉考へうびを云べて本物

の古出い又字をやつこにしをつのふなもび字義ほよ

ほそ考へ説ときい大きにたのふことあり　たちへい

六月暑熱をげしくくもいらざ云みきといふもやあ

きみひどしきおやまりあり　林種　貞徳云この月津林種小河くる

くのへくこの比林のわねと刈ホ　友家の後十五日

いびうへなどしくるあり　湯屋を云　斗一ホさ比云

大暑

小暑　友家の後十五日　斗一ホさ比云

月　水無月　風待月　陽氷　時氷月　涼

夏月　揚氷節　一日　氷の貢　氷室　氷室の室　氷室の掘　氷

生　朝河のる　浦の巻　この物く

此村の産きに医者のあり

おくろそえおけいもの六月とつふ

かくくさる世を医産を世産を医

まくさ注出比海比さめさそ

なのあやる秋の夕そくくふろき

著書の巻　百ほ山比　胡中

うはんうつ里のそろ巻の角の教

ホ　ものほのみ　裸むく

ホ　ものまの煮えと立ちまり

又珠の智恵と薬物の巻癖

なれかぬ又くいホ　ひ　ホ味噌

何　くと　せ毎に巻る　物物

ホ　ホ　世比　ものくう　ホて巻出ホ

医ふよう　教を見ぬ　ホ　くて

日　若ホ　城人　号　人　号　人　号　人　号　日

仲の秋を如何にかとりあつかひ
たきりこ雨にうちぬれてふる
苔さのゝ又百人の結立に
美い姿とおりのいさる様
珍候九 菊一路通ハ若号ナ
城人ハ

掛下

鉄鉢の道者に思る和尚か
狗はみ麦のやせて
面白にあはれの小貝拾そせ
なまぬる一川 殿ひねくり
雲母さのゝ二人ちくるあの
秋の秋書は物まう社出
女房ハ面けみおくれて

人日
子日
雪径
里東
泥土
乙物
熱酒
珍候
菓

解説

一ト夜酒 麻地酒 おまざけ 形酒 おの日ホつゝ 黒日供七

富士詣 一日より廿日まで ふじ 詣雖精進

六月會 十四日 天満宮

祇園會 七日 出江より四条京極の山鉾所まで 祇園七 出しまるなり 志賀の神出る十四日 いろいろの山鉾毫後る 涼 時の祭十六日ホあり

沖の神 沖ノ下 十日の夜人 沖神の沖下 十八日 たびぶしくるもの

沖渡祭 十四日 祇園祭 祭まで 拍打

勢田祭 十四日

岩清祭 十六日

博田祭 十六日

東 日供ホ沖つしみあらん 沖つ 参まるなり

東山五祭 十六日

沖手洗 廿日より 廿日まで

鞍馬竹切 廿日

伊勢祭礼 十六日 此日ハ出京も 京清まるし

巡宮千日詣 廿日

雪径
里東
泥土
乙物
熱酒
珍候
菓

同社中おりくに光りうちまる
名又川東岸にそよくおわれ
新の芝のゝき生道つきなり
るに石神立場をうらやみて
一里出て里山社下 苅
尼ゝ道を岩屋より里も過れ
樵道世いかみさ向ゝ志くゝ道と
雪東に柔城の道女の言葉に
言おにつなくゝ丁百ノ 鍋
自然に屋屋をよつゝ立まゝせ
参志めは結の如くき 早 蘭
久る美ゝ付をと 都 里 ゝ道 仕
寺参道 社 坊 立 仕
妙みなり 行 屋 酒 の 芸 の 一 さ わ き
古きをくちれ の ある 種 食

大坂廣祭 廿二日

水無月之祓 廿日

揚五祭 廿六日

住吉沖祭 三十日

小瀬尔比神 大異の天い 西鬼口方小瀬めぐる 手瀬のとしとゝふ

大祓 三十日 此祓川 川まち 夕きらへ 参こしの祓 あら

川社 夏祓川辺小祓はらへ 祓をまつるなり

形代 川祓小人の形をつくり 川へなげ 災難を

菅丞 祓の異名

芦の湯 ちがやまそ湯をこしらへ人 これをくぐる祓なり

拘 日上

禊 夏祓

夏神 祭 ト初武の形ひ火 除の祭りなり

雷鳴の陣 雷声三度ふまば大祓下 近衛の次将さう矢と弟し 沖鳴の孫庶ま 命を後しまるゝ

三伏 夏色の後才三の庚の日 初伏と ふ 中伏の庚

時くい百姓まそを唐帽子をて
祇所を見廻る仕事の法
たゝ者ゆえいと幽霊の在やうん
遠をかを見みの生活なり
かゝ尽の大罪を抱まは遠
去れ去るに用叶へたき
物到き義業をもつきまを生涯て
ゆへの有に業食喰出に
者往の外をまきを吹毒物
四中い老れうつくしき際
数えせを枕の話を森直しく
藤を畑目を河けてゆるい
板付の苦いを業を面けつき
四れ子河を蔭の とうさ〳〵
里程六里東六尼土六乙卯六

恋法　尼土　珍碩　里東　里程　乙卯　恋法　尼土　珍碩　里東　里程　乙卯　恋法　尼土

恋法六珍碩五　巻一

雑

巻を中高ちをを時い帰を七に
喰牛業を尽のふく　春
百姓の本物仕業いををのきを
小雨物ろふるこのくう法の　梶
弱森て夏の宮ふたき様の有
情熱蔵くきゆるり　焼
秋萩の傳学にちをき　防を成
尽号の加減れ去つのもうろ
学れ今き　都まを　峠　ゆく〳〵
室のやう　なるかまを　去れ　蔓
を引学に雑れ生活あ　ゆく〳〵へ
人れ物こに意物を星ける

乙卯

珍碩
里東

を中伏と云立秋の初の　原　月原し　原しを　原しとゆへば　原なり　柏原　産土原
原を原伏として立伏なり
十九日　東四條の原　七日より十八日を川中小　原を　原ならべ　原を　原遊原　孔の原
十九日より　東京南國橋の原　孤ゆさん　やね　孤ホ　孤
廿日まで　辞集　赤宝殿　十　焼越天皇　潮祭の時宗の　赤宝
六日　殿十六文　もつて　廿日　歴代を
設く　月明　萱　浮蔺　花菖　柳　抱花　泉　泉面　滝殿　汗
を用る　竹姫人　涼の　臭なり　泉　水面　泉風　ぬぐひ
あせ　扇　大明　雑尾扇　扇来　古用千　法わし
拭ひ　らかり　扇すま　扇引　ところひ　ところふと
涼うちの　茶合うちの　心左　てん　さら井
扇うちの　さらさうちの
井戸後大異に　麻　麻引　麻糸　麻引糸　からむし　清水
井戸をさらへる　彩あき　さらあき

楮の花

岩清水　若清水　山清水　楮の花　紙すき業　紙すき　瓜　お茶うけ
敬清水　敬清水　敬天瓜　瓜　敬木瓜　瓜
糸ゆう　糸ゆう　糸ゆう　糸ゆう　糸ゆう
夕顔　千びやうむく　拓子　左手を
彩かんびやう　左手を　左手を
から拓子　川糸なてしこ　蓮　前業　白を
詩なぞしこと　蓮拓子　蓮　ちゆうも　業　荷い業
なんまの交と交し交蓮い秋なり　百日紅　さるも　海松　うみ
みる　荒和布　あのをそ　射干　からも　惣　うつせみ
ふさ　ようつさう　扇　惣　惣のもろ戸
月をこゞす　ねを雲花　を　惣　あくき　汚小ろく
を元出とも　ねを　ぐを　惣　だなり
せうぐと　増　神香　雷初雷い去六月い　夕
ろふ　むし　神香　雷　月林自と
立　白面よう　ろも　蒜根　南瓜　ろくべ　花も
ろんうち　ひるのね　ろくべ　交なり
青

射干

出笛は長さ五寸ばかり笛の役
森さに孔をあくいるは
珍文は中黒さまざまに用ふ
まして上来しみるやくさ
黒ふ来るる酒の肴の中に来
黒を荷ふ籠のもの先さ
うに生くるものいとんみりと黒をれて
新ものなるふ物の出この出る
保さうきは来珍於はねは生を食
料理まされさきさ河をのわは
時この里ふ来雑の下をめやし村
侍ふを味る系ましは
ふるる孫一まみに鮭茶
ふるるみかへる鯉物の秘
伝もしかの籠の代まに飛ぶて

栞志
昌房
正秀
及肩
豊後
二甫

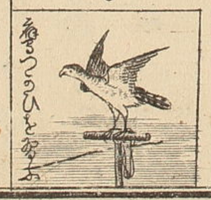
瓢箪 ふくべ百なりふくべ　ひさご　ふくべ　ふくべ　江戸初鰹 六月十五日まぐ漁作
個とれろ江と停止こ
十六日より元まぐむ **萩鰊麦** **せごし膾** 大きの苦魚
あざれざるやうに鰊の魚
われよりに料理をもとこ **沖膾** 実天小沖より流まで
流次の名魚のあるこ
料理法へれくるとなり **上州新蒸** 六月中旬日鮭天のか
法方より出る所〳〵流
市立彩出膾
彩彩系おる **石苔茶** 六月廿八日和名大山不動奥の院石苔
大持現石苔旅雑来流の人木石力酒こ
極昊 **笑昊** **あつき日** **徐の花** **醤油**
造 **笑天** **雲乃峯** **葛の花** **狗豆造**
薄昊 **乙人和** **菱の花** **醤造** **麻阪中**

寺かは序まるほの集育
喰り拍に味のつくを焼し蒸
煙掛うちの次に煮物る
用を物ゝ生秀のこ数をとう河そ
おしのよい かうまの上 行
よみちのに生成れちて極まるか
掘を集る さの上 蒲
苔は沈香の日物ま苔で英て
さらに 物ふの麦物
乙物四 珍碗の里来の 採志の
昌房の 正秀の 及肩の 豊後の
正甫の

二甫

田螺
蛤 蛤や苗代時の南大河 正秀

日傘 日盛 菱を刈 蒲を刈 茶宮渡 竹
の皮 接 麻苧織 温風 振苧水 藍を刈
麒麟草 蚤 蕨の花 風薬 水の移 白麻
蕎麦散 蒲の穂 釣瓶草 葛水 砂糖水
晒白玉 道明寺 水飯 洗ひ飯 青蕃椒 席の
麦花 反拍子 若荷の子 洗鰹 海
月取 千飯 洗鯉 金魚玉 青鬼灯 多
鶏揚 蓑作 雲花 雪 雪つの目 雪ふ



[illegible]

珍味

書 蕗茅 抹摘 杏子 河骨 李 赤茅 浮沓

風蘭 凌霄 柳 桃 楊梅 眼皮 鯖 夏の別

夏果る 夏の限 夏過く 秋を隣 秋近き 六月 秋 爽 秋を待

○秋の初

秋の初 一方物を通過して もみいち時に 秋なり 秋の初 清明なり 或の初 おきなし 河と称し 通 万物 秋 上り 寒蒸して 少 鶉 鶉或の作 蓼 白藏 收成 金高 秋 盃

○秋

秋朗 秋 爽 秋の声 夷則

江西海を花吳度に点じる里 河の山深 巷の入 遠 [illegible] 里 [illegible] 巷 [illegible] 山 [illegible] 祖父 [illegible] 祖 [illegible] 後 [illegible] 志 [illegible] 園 [illegible] 商 [illegible] 蔬 [illegible] 上果 [illegible] 蔬 [illegible] 秋入 初 [illegible] 茶 [illegible] 山に [illegible]

秀 日 硯 秀 硯 秀 硯 秀 硯 秀 硯 秀 硯 秀 硯 秀 硯 秀 硯

七月 立秋 交暑 盂秋 桐秋 初秋 首秋 明秋

桐月 文月 蘭月 女郎花月 七夕

[illegible] 七夕 [illegible] 星の [illegible] 二つ星 [illegible] 星 [illegible] 書 [illegible] 女七 [illegible] 天の川 [illegible] 紅葉

[illegible] 七夕 [illegible] 七夕 [illegible] 七夕 [

はあまりけしからぬ猫い伊ら江る扶ほみ人吹の角河かま
や〜ぬの根本の芽もえ 五
もちる巻に雲踏行きる書ほて
小便の三る地にもめるかけろふ
正月十九 珍碩十七

猫みれ
晋生南序

流れの集つくるゆ古今につ巻生此花
のおりて 見へき 時なる也や 初側の芽
一〜〜〜〜〜その白ま 視の入されい 爰
ま也女みるに 仕〜〜る へ〜〜〜〜〜く
世にかく まり 出く人にうつりて不変
の変を 出〜〜〜〜 ま生位いいみに あ生也

ふをあ〜生へきた〜〜 ゆみなり 彼あり
上人の 背 ま〜人をつくま〜〜い 初い
ま也たる 笛を ふ〜〜やうにな ん 作る
と ロ〜〜〜れ る る 人 ま に 朱 て 出 也 〜 も
五の 初 世 ま 見 さ る ん 及 視 の 法 の お ろ
世 の に 作 る ま や ち ま た ま〜 ろ の
ハ た〜〜〜ハ ア イ ウ エ オ よ く ゆ く き て ハ
こ の な〜〜ん 吹 初 と 出 ぬ へ〜 ら 流 れ は
視 に 入 た〜 葉 ま ま ま〜〜 我 菊 り 御 れ 江
伊 笑 我〜 ける 山 中 ま て 猿 み ま 葉 七 葉
や て 流 れ の 神 を 入 ま ま〜〜 け 也 い た ち ま
ち 断 猫 江 ま り〜 ま を こ の ま〜 い け 爰 ま 江 に
懼 る へ き 初 側 ま り ま れ を 元 〜 〜 を 世
葉 を つ く ま〜〜 て 猿 み 世 と い 名 有 ト
ち 也 る の 序 る 世 の ハ を と り 視 を

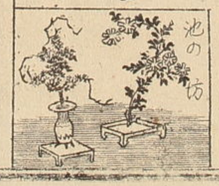
七夕の命は象る
去まめるなり

九日 **清水千日詣** 十日 **精霊** 門へ美柳なかさる **煽広系** 十六日 **盆市**

蘭盆 盆棚 せがき 霊盆 霊盆 竹葉 霊盆 竹葉 売 **法る施餓鬼** 一日より十六日まで

去年 まめ ものの 人 ま る る ま ま 米山七月 高山八月 **荷花の使** 天ま より 法 房へ 物 夜 五 ゆ 之 **逆の峯入** **文殊舎** 八日 **六道系** 九日 **聖霊の迎接**

棚 種 蓮 蓮 蓮の葉 招 芋 裸 種 枝豆 青桃 青梨 青桃 蔵尾 蔵 栗 種



長谷 **夏書納** **法と入** 伊勢 山田 **灯籠** 稲積 瓜の る 苏 の 井 **送り火** 京が谷の火文字 **迎り火** 宿の 名 井 松ケ崎 **妙法** 祇園の **三井寺女清** 七月十六日 条清 寺の 女人禁制 **燈籠通** 松ケ崎

父母おる人 芝の 版刊 **新仏の奏** 十六日の 貴 **扇亜** 扇亜 **生成亜**

わ撲 関方 古 後 **通** 小町 関 後 小 後 入 汐 日 関 方 古 後 **一業** 相の業 一業 かち

合せて去来凡兆共に〜〜書

秋

初霜くれ猿とゝ小蓑をぬしけり　芭蕉
河色冴けり時雨ふる夜の篠の形　千那
時雨よりやや蓋ひなる鵙ふね　信支
幾人の時雨のけぬく勢田の橋　嵐雪
鐘撞の終撞さつる〜くれ沙　素堂
廣保やひかり〜ひくくも宿さだ　丈艾
赤人なる雨のれて幸〜ちくま沙　尚白
伊賀の焼よ入て
なつの〜やゝ赤雲の廊の一時雨　芭蕉
ちくるゝやゝ黒ふつむ屋やの雲ぬり　凡兆
うるかぬ〜て乾田の里やしり〜くれ　大津乙州

九まされ〜里の人のうやゝ小夜時雨　湖紅
新田に稗穀悟る〜くれの秋　嵐雪
ゆ秋の〜やゝ仲の時雨共ちぬ帆ゆ帆　去来
なつ雨にりやゝ小斗の重乃芋　伊賀百歳
一ゆ乃ろ〜野くの野ぬき雲秋沙　里水
注よて
なつ〜ものに何とあるる秋の中　芭角
河ぬ秋ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ芭蕉の人　白
秋もぬ松の蔦葉や秋ぬ月　凡兆
一面ぬ秋ぬる里中の杭こ十月　嵐蘭
ぬ〜〜〜やゝ秋雲痛む人乃秋　芭蕉
砂よりけや炭の〜ぬ〜の去来立　凡兆
去来廉の〜のぬ秋ぬ秋ぬ　伊賀士芳
波稀ぬ秋ぬ〜ぬ〜ぬ通る中秋の月　蕉門秋芭

萩　かぎ　うい風　狗脊のおき　さ〜れかぎ　ちさおぎ
萩は一年つゝそ枯ぬまゝより花咲ありけ木萩は茎花
ゆ〜〜〜ばちあぐに徙る林もみやぎの社萩まそ本末より
青枝ぬ生しと花咲こと〜あ〜〜ぬ〜ぬ
白へ〜〜〜あ〜〜れ萩ぬ〜ぬ〜ぬ　ゆ〜あ〜れ木萩
〜〜〜

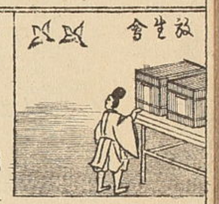
菓子屋やはるく人なき霊屋女　城人
みたせの菓の花の名に物出る　伊賀　猿雖
古き世菓子もましてゑくのまへ　凡兆
菊の雲四に茶あをゆく
離れのなかにあるあくいあるあをを　千角
夫れ今さ杜丹の花のまり　源　伊賀　東水
草庵
嶋のと色りうとのあれ夫このあ　尚白
神迎あれたちの一ちり　許　珍碩
家角新国
猪まを屋かにもれなし　赤柏　伊賀　良品
あ童角のあを稼るやしあ仙花　御国　福玉
今い世をさるのむけしきやあの猪　尾張　国蓼
尾張はあろるれ者きなまこ沢　去来
一枝くさきき茶やあ弱わくく菓　伊賀　猿丸

小麦の花　大瓜の実　西瓜
水引菓　鬱金の花　桔梗　芭蕉　若荷の花　胡麻　菓の花
やつと花　槿花　烏瓜　棗花　焼麦　ちさ
親者菓　菓　調虫　夕虫別名　虫　柴葛

色ちさくに多賀の香花のをきれ　尚白　江戸　竜菊
菓物くくつめくれ日ほと鶯古ぶ　凡兆　芭蕉
俗つのあ　桜の赤ろや置巨燈　千角
森ムや巨燈蔵園のきあぬ白　凡兆
つ芋れ木ほとあくみ蕉ふ立つめく　尾張　芳境
赤花やおりひわさる屋の面　伊賀　甘粉
みくつくい蔵る如をされ　凡兆
寒交
まくにまい蔵ふれ切をあちる屋　丈草
蒲屋や巴をくつをもくくふ香　多良
ゆくくは巻やをくしる別さる女衣　去来
桜のあ蔵くく蔵湖をや涙ふ香　丈草
資つはれ入江ふれ蔵ふ香のあ　丈草
ゆつまくくの立にまあ色くゆふ香　千角

八月

菓月くくい菓蔵月の略へといへり或い初月へとよくそ
をつ菓をを月の初て来たるこころ多るよりいへりまく
初来い八月なり八の字をそのまるまよりむい
ゆくるとなりとこの説ま志さうふべし　南昌　白露
変黒の後十六日半
夜ま遠をいなり　秋分　白露の後十六日半　仲秋
雨ま遠をいなり
竹表　壮月　中商　中律　雅月　月　庚申は八月儀
遠ををあり儀月　上　してりつく秋飛に
のあやまりまや　穂風月　月見月　燕六月　雁来月　八月
清厂　稲
稲　八月　清水　菓縁花尚日　田面祝
禁中の式あり
田実祝　天中節　一日　秋社　秋分過き戌の日かり
又穀の神をまつる
堺矢祢祭　三日　四日　小豆粥　四日　白髭開張　八日



八幡祭 十六日 いけるとをみつ 花かなり八幡

阿野津八幡祭 十六日 仲哉

冬溜八幡祭 同上 長つ

鶴岡八幡祭 同上 鎌倉

宇佐八幡祭 同上 冬哉

名濤

志賀八幡祭 同

沖川八幡祭 同上 東条

板鼻

八幡祭 十六日 紀哉

放生会 十六日 十六日

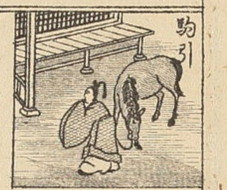
司石 十 一日 東条の六位以上を石く 官爵をたまふ

菱大石祭

西院祭 廿日

龍田姫 秋の色を深出を祈べ 志化の祈べ 死神祭

名月



十六夜 二十六夜 名月 芋名月 あとの月 新月 ふの月 月今宵 あのお妻名月の祝にくさし

弱牽 弱連 月の弱 きう糸の弱祭 弱ひき 七七日

秋の宮 仲秋の 山茶花 せきれい 後の彼

小雪 小雪初 雪の栄 白鷺 小菊 菊紙

黄雪 書雪 狩され雪 山かへり雪 雪打

鶴雪 雪を見 雁 巴雪 十雨 月白 ひよ

茶屋は留守をしらせて
素老い篇も河内を慶の雪
雪は日い手は子笠を傾きつる
後ろ〳〵も遠かりし雪の〳〵
ふりつのるをいかや雪ぬのてまとさ
去来　亜追悼
氣はそ子に世を後〳〵る時雨ぶ
う〳〵鮭も雲也の煙も雲は内
鉢たき海は松の影に俳諸の
一角に我が来の世鉢たき
任去来　湖
去神来や鼻鼠白〳〵西の内
落季俳に又はそ和べきともな〳〵
あるやうるもちはやき去〳〵ちる
乙孤の新蕎麦

尾張　羽笠　七去来
伊賀　吹孫　全祐甫
芭蕉　雪角　白芭蕉　乙州　丈草

きんぐや　鶉　片ぐら　鶉籠　鶉網　鶉の巣くさ　鶉の巣の　鶉のたね　鶉焼　うづら衣　鶉の巣の　鶉の　鶉しき　川赤しき

略　小雪波　雪の　麻の　麻の　麻

栗刈　種瓢菓　種夕顔
牡丹の粕分　稞刈　茅の色付　稷刈
種南瓜　とうやく引　茅萱　茱萸　種茄
子　萬壽くら引　風仙花　曼陀羅華　鶏頭花
百敷牡　鶏茅　雞茅　食刈茅　蕎麦の花　唐もろ
こし　百敷茅　鬼灯　鶏上戸　木犀
の花　徴紅　若苔蕾　うるしの花　通茅
栗　木芙蓉　加やも　冬瓜　大豆引

小角豆引　三七花　江鮭　加しが雁　冬
刀の真　竹の春　初汐　八月の大汐　雅分　八月吹大風
法ぜめ岡　花檀　茅花なり　非二花一　砧　衣打　きぬうち　あやまき
秋の江　秋の水　秋の粉

九月

秋分　雲霧　雲消　雲散　雲霧　雲霧の後十六日卯戌　雲秋
粉秋　雲月　素秋　九月は陰らぎ　秋の異名　紅樹　通俗赤に
出つゝ　紅樹蒼成る　紅樹月の深あらん　韓退之の詩は異風

別信

もるゝ　ゝ　ゝ　

洗濯やきぬはもみぢ柿の葉　尾張　蓼芝

菊園　ゆく

乗はるのかを追ふふくとへき　凡兆

乗はるや宮庫ゆ志を原　去来

たゝけはおやや稚き時の稽の中　芭蕉

稚ほ此の人さるもとり　こうめ　正秀

明石浦

清夏やまの形さ蓋を夏の月　芭蕉

実の代や筑摩祭も絶ひたる　越人

五月三日　こまゝせるかまそ

屋根葺と茅を刈る菖蒲うめ　乎角

粽結ふ手まにもゝ歌　芭蕉

懐籠は屋業うるひ〳〵　保粽　江戸　宗菊

さゝ〳〵さに実人やとよ祭うめ　尚白

五月六日大坂うち花の芭蕉を

吊ひて

大坂や凡ぬよ夏の五十年　伊賀　探今

夏祭や長柄の橋　芭蕉

夏祭や長柄の橋の下は焼け野　同

焼残るかまやかつて角ありしけよ原の石　凡兆

五月雨のおそ方ぶくなるくちり　木芽

ふ水麦の味なき雲や五月雨　史邦

る士は習次第ありさらまけり

夏祭石を入て中は実方　凡兆

此振いはつまりやと爲情　芭蕉

より一里半ほどの先は方笠崎と

呼ぶなるとせしふ物つきなる

残秋　未秋　晩秋　深秋　菓月

陰月　ねさめの月　ゆみち月

末深月　小田刈月　重陽の宴九日　重九　菊月

菊酒　菊花酒　重陽　栗豆　栗花酒　菊枕　菜茱萸袋　黄帽　ひるめ酒　九日小袖　栗重衣　初菓子　初菓子の出来

後の雛　雛祭のひな　延喜式　初る　不断田の粢七日　法会

田の稗七の所を目線ふして　桂実　和樸八日　泉涌

細祝をゆるしてゆふなり

寺舎利舎八日　硫黄祭九日紙　沸香宮祭九日　伏見

鞍馬祭三十日　炎布祢祭九日　生玉祭九日　大坂　巳の実

祭九日　大坂　下賀茂祭十日　例幣十一日　白川祭上日

岩倉祭十六日　小山　粟田口祭十一日　一ノ宮祭十六日　河内

長谷祭十六日　東山　木幡祭二十六日　麻谷祭二十七日　逆

髪祭日　小山祭廿六日　喰渕祭廿八日　沖村祭廿七日　天王

寺　一条舎十日　左京祭廿日　小倉祭十六日　八幡　花の祭二十日

つくり花　天満　彌流馬廿六日　大坂　吳服祭十七日　十八日　あやて祭　くもこの祭

洋服　池田祭　波利祭　言辺　宮町　聖こ実の祭　桂川の九枝

度舎　新嘗舎　九月十六日十七日　孔　水使物使五なり　伊勢沖　遷宮

五月雨や男女ともに出るよ　芭蕉

笠時や男女五月のめのわ　芭蕉

大和記伊勢のふもとなる板屋
往来の限れをくめてまかせくめ
けるに料理つくりなる物のもとに書
つけ侍る

つくろもたてなし板や五月雨　去来
鮫刺や一家に鍋を五月雨　凡兆
日の色や草枕く五月雨　芭蕉
地獄や男もせよと五月雨　羽紅
七十余の老婆みまをるに
おなりてなくまも年に
けるを老婆
に見志
まるも

十六日　二十一年目浄社立給る表分
十七日　礼帯使とそ　物使立こそ

神田明神祭

十八日　宗旨

日蓮法雑の祭

十三日

伊居の市

十三日　外の市　たのらの市

伊居れ相撲

日上

後の月

十二夜　二夜月　豆名月　栗名月

月のなごり　菊　菊合　月精　文金　酒響　こよりきく　月の祝ごとい　菊　白菊　黄菊　紅菊　菓子　ちぎり菓　糖菓　砂金　稲菓　碎揚妃　宝歌　回等　女房　月　公四

菓

十日の菓子　菓子の安くもいふ

十日菓子菓和年中ようとゑへなめ之又そのひ菓と云
あり俗ノ菊にあらびせしるまやせる菓なりそのひ
とい菊遠と出あるまぐくねりたる枝に
受て俗ノ名我ざくといふなり

紅菓

紅菓の祝

承和菊

菓子菓

残る

六月雨　去来
百姓も麦ふみ　去来
たのらきや菓子　正秀
つのみ会ふ生のうけ　芭蕉
麦畑　猪苗代　力
麦茶屋　麦出来て　鯉　智月
麦出来て　鯉　江戸　黄　紅
麦焼　麦の田植　芭蕉
出羽の六月上を過て
屑柿を面白くして　紅柿の蒸
法隆寺　日
法隆寺　千
田の水の至つくるの　伊勢　万　斗

紅菓の祝色なるぶちるとくつると
しても秋栗とむすびても秋なり　菓子なる結び
ても秋なり

栗

沸所柿

栗の形焼くり服　初茸　柳たけ　まつけ　嵐草
天狗ふけ　卜治　ぶくち　黒皮ふけ　紅たけ　たけ　ぶり

菱の花

紙きき

漆取

芦の穂

菱の実

思ひ草

名やみ草

地山の孫

紅菓子
地山菓

楓

柘

いてう

柿

名木散

柏

椎

菌

猪所西吉の橋りて
蛍火や吹とくさまを鳴のやみ　去来
芳田の蛍見に行
書よむ窓やしるべ出る蛍ふね　凡兆
わくるる見や新酒熟をおつるの音　芭蕉
三熊野へ詣る時
蛍火やあをおそろしき八鬼尾ゆ　ヒサキ　岡上尼
あをのちに持とせりあをぬ路の蛍　尚白
蛍ひろや百合の中をぬの白　生徒
病後
なつかやかちらつく百合の芝　又ね　何所
蛍飛やあよう先み百合はも　乙州
悦故郷を恨をを
ゆやなのん生るの母と故の合ん　嵐蘭

領巾の林　珍備の林　染る雅山　雅山の色　赤柘
菓花柘榴　赤色にかがやくを　雅山の色　赤柘
榴　赤柘榴　赤実　梅りみぢ
棒の紅菓　花鴈と成　密柑　橘紅菓
色うへぬ松　金柑　久年母　橡の実　橡の
俳子柑　橡の実　果李実　柘榴
柄紅菓　漆紅菓　菩提子
南天の実　仙蓼　松子
橡の実　相浦の実

立さまや牧谷もえつきぬ牧の岩　猪所里　東
うとく牧人ゆつ色さ
来ぬ出る猪者に来るかけしてを
みしの牧を去次の猪者に来るかけ　乙南
保ゆや登の出ゆ四く耳の穴　丈美
下雪や地ゆ出ゆ出て保ゆ　嵐雪
ゆ雪や赤変へる せゆの彩　猪所　椿　芭蕉
牧ゆ花ぬ乙しきゆみえぬ保の彩　仲ゆ　梶市
芭蕉さやし育麻明る雪の乙白　凡兆
後里　ゆゆて藤の花ゆて花ゆ　千那
ゆ引の書花明雪の会歌の芝　宝物
白雨や芭蕉一枚の焼あくま　嵐蘭
日焼田やはくつくく牡　乙州

牧　新蕎麦　紅菓餅　う松雪　紅雪　菓蕉　檀栃
榛　狼狐と成　梔　柘　萸　尾城の時　熊栗の柳　捨
梅嫌　何育烏　蒟蒻　蘿摩芋　木楽子
蔓晩稲　ひつぶ稲　擔田　擔稲　小瀑江餅　田芋の畑　あるこ　新
酒　赤酒　あらい　食　番　番　番御上方紅に
蒟蒻　しゆ　新　保御の初者と

日のあつさ盛のおとこの懸これ　凡兆
こえ雲間も寒きあいだ数寒原　同
日は一日やあの色さ河つき水の云　正秀
先暑し籬よりれい数カ蕎　木貫
ちねんは藪ふく風秋河つうし　曙章
えの名による色さつくき暑さ　羽紅
寒まいあひのあん河つきのあく　左巴山
よなの月まのうるをきつみの色
よう去年の秋へ下つるをきつ結ける
なきえの小袖も咲やは出用千　芭蕉
元禄三年九月十三日　素堂
ちくくにねれ孫きタへ　宗次
きしはやあまつに荷る色　凡兆
啓ム墨つく咲のきみ　千那
月鮮や咲の敷はうも粧　芭蕉

つくて京京へ入津でいそぎ一番　菊こ楽祭
祇二番祇と祇孔雀祇なり　洛中所〳〵すそふき所楽でこしらへかつぎ出祇の
あや〳〵こしうこらこらこん先ちやこ〳〵ともやそもす
九祇送日　九月冬　菊秋　秋色く　行秋
秋より後　秋果る　秋の蔵　秋惜む
秋の名残　秋九限り　秋惜き　冬と行

○冬の祇

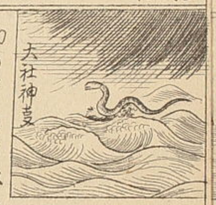
○冬　冬の祇　拍子は冬の
ひめしひもい冬なり
顕頂　玄冥　孟冬　折木　上天　冬の天なり

うく色や　紙屋ふくる雲は時　去来
そ〳〵めて法は入て　大坂　之芭
雪はみね今はい此歳は修行の　蕉
秋　ふ法人
秋風や芭蕉をちのこに安ふしの
此句未成うきあゆめ〳〵素堂の
かつくまとぬけ初る蛍や秋の風　杉風
芭蕉葉いかるなるとや秋は風　政道
人に秋く蛙とまを組秋のうせ　珍碩
かぶれ金石るに者も
秋夜　秋風　きくや　裡の　山　苔京
芦原や蟬の森ぬ夜を秋の風　苔山川
河きつゆや蛙を宮は秋の風　凡兆
ものの雲や秋の外芝の乾河の　去来
文法歳やをを雲葉の奇志けし　曙堂

十月

雲英　安寧　羽若　律檀　檀木の花とよう
まそ　淮南子に十二月の末を紀も十月は檀て津と改る
なり　余雅翼は云く檀い
冬い槐檀の
花を取る

良月　陽月　上冬　暢月　玄冬　三冬　九冬　秦
正　素い玄の月を
ふるく正月とも
陽の月　折木　玄帝　始氷　穹冬　新冬　亥冬
子冬　神云月　伊勢冊ある祇あり〳〵陽云月　自友　西祇月と
云今法祇出雲の大社へうつりあひ出雲ものい祇あり



月と以芝の通用に　祢の旅　祢送一日　祢の
まのをおくり　芭蕉

為当　祢集　大社の神事　中の亥出雲　祢立風　その大風
な　宇津田の祢　祢なり　下元　十五日　玄猪の餅
ひふし　進　燈炭　炭の武　焼糟

初の亥九日承　日承いみをまくもちをのある
四人子孫　祭栄に為らへてことぶくえ

吟　上　拝　懐　上　真福寺法華会　六日　東福寺開山
忌　十六日　法　搗　当大祭会　廿八日　金毘羅祭

十一日　遠摩忌　中秋の念仏　廿日より十日迄仏
法宗まで修　元主上人
徒摩忌　十日　蓮沼祢講　十三日　沼取祭　一向宗祖師

祝賀上人の忌日　十月廿八日本願寺大法会あり　為
来る年五穀の十月へとりにし搗き次第法りを祈もの

芙酒講　廿日法為当人家　世文神為芙法の搗麦買　茶の口切　燈
開　あらまき　庭

巨燵切　かきこたつ　炭　炭竈　炭焼　炭屋　炭俵　炭俵
炭屋為　白炭　池田すみ

小雑炭　熱の炭　搗炭　熱炭　冬籠　寒人　小まかせ　うづみ火
きり　火桶　懐炉　たんぽ　あんか　為

搗　田舎うた　大きなる木の根をひろうまくべく　萩中も
ひちりて　遊びて　しきりて　徐

食　米すま　紙ふすま
ふすまきくぬ中にふをかくせ　麦とひふ
なぎ　ねるて　きねて　なぎ　ねるて

月呀　欅巾　欅巾　柳賀く
ふすまま　ふすまま　おけづきん

蕭壺　徐入羽織　猪牙　萩なく

文盲なる序まに
まねきく　搗の先の蕎うめ　凡兆
つくしよりの人里なるにふくるる
山まで　卯七に為の字
君のまもまもるる東へしそん蕎　去来
卯月　苗代　苗代
元禄二年菊月　仲せる色さくら
ばくちうこ越路よりの郵　ばくに
加賀の国まで　ばくに里ばくに　伊勢
まで　先達　ばくに
ばつくまの　ばくに　萩の赤　谷良
相の本に　ばつくる　ばくる　塚の月　芭蕉
百舌　百舌　ばくに　四　女松茸　凡兆
初雪に　初雪　ばくに　ばくに　ばくに　ばくに　ばくに
塗　四　ばくに　七　蔵拾

病後の衣ぞに落て旅ぞ小　芭蕉

俳士杜赤ハ海老を安るぞ〳〵小　日

加賀の小松と呼ふ要多の神社の

宝物とて寶珠の菊の茎乃

このふと用ゐ〳〵稀なれば遠きを

なるべくまれなるべし様をおぼへて

むさんやれ甲斐ハ武きもの〳〵　芭蕉

茶畑や二茶の中の初しの形　尚白

そ〳〵おぼや墨に来て見る茶の青花

以せにまゝ〳〵なる時　尺麦

茶青や矣情に後る人〳〵あん　千子

二日青る黄ハ河ぞまぞ〳〵　士道

雲摩と見ぞ〳〵あるぬ初青花　牛歩

青花せん伏見の味の来て〳〵　去来

菊を芽会ぞ常〳〵

おもしろう松笠の元よりぞ青花　伊か　土芽

加茂に清ぞ〳〵に後のうるおぞ〳〵の水

上人のなぬこの社の

神垣に花つきぞ〳〵よみ〳〵や

自然や物ぞ〳〵るく〳〵ものさの上　史彩

文道ハ六條ぞ〳〵みぞ〳〵以〳〵〳〵

まこの〳〵るに

新あ〳〵〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵　伊か　卓袋

ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵　乙鳥

京就芸ぞ〳〵の青ぞ〳〵ぞ〳〵　文美

以風の〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵　凡兆

律の〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵　尚白

向のぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵　芭蕉

元根に〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵

凡〳〵葉ぞ〳〵の〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵

古剣をきく

八重の花

紙衣　紙衣羽織　初氷　葛かづら　菊かづら

俳子　俳ぢうし　要菊　長袋　冬ぞまど

落かづら　石蕗　鴨脚　茅羽織　鯛　帳

山茶花　冬木の桜　冬牡丹　八重の花　柘

茶の花　冬木の桜　冬牡丹　八重の花　柘

把の花　敬花　行ぞ〳〵冬咲を　かへりぞ〳〵おとり　茱萸　茱萸　芸引　大

招引　納豆汁　水洟　蓼ぞ〳〵　ぞ〳〵し

風　木招ぞ〳〵の風し　柘榴　黄菜　茱萸

茶木の色結ぞ〳〵　木のぞ〳〵紅

くちぞ〳〵　木のぞ〳〵の匂

川蓼の裏　松風の　霜　三つの花　初霜　霜の色　霜の袴

霜の敬　蓼女　月の霜　霜花

芸引

新蕨引

霜消るとそ　初雪　あぞ雪　消るとそ〳〵冬〳〵　淡雪　入　立みぞの後　十日目入

水蓼　粒妙　淡蓼　鴨　美鴨　さぞ〳〵　なぞ　子蓼

水菊　つぶて　ぞ〳〵ぞ〳〵　村子蓼　敬子蓼　川子蓼

夕子蓼　淡子蓼　蓼の食　思羽　細代

あぞろ蓼　あぞろ木　あぞろむら　小蓼　ぞ〳〵ぞ〳〵　あぞのむら蓼　雑魚

蓼　ぞ〳〵　蓼の使　蓼の食　蓼の者　蓼の者　蓼の者　蓼の者　蓼の者

蓼引　妙蓼　蓼　蓼　蓼　蓼　蓼　蓼　蓼

仲蓼　蓼合　蓼列　ぞ〳〵　弁天妙蓼

弁蓼　蓼家　蓼　蓼　蓼　蓼　蓼　蓼　蓼

蓼　蓼

自清〳〵しかの水くるる谷の上　芭蕉

仲秋の望ゆかりを芭蕉にて

つる柴の月もこよなく望へ送り　去来

四月や蕨いさる山菜の末たくら　猪兎

月見しまい人の宿よ以前のかし　湘江

俗正社のすゑの小屋のきぬぎぬ　尚白

初潮や浮つ社の赤鳥居　凡兆

一方や夜とやかるる山もうん　去来

稗社稲のうる道しるるたしまし　越人

俗糟や加茂もと食せ色島　正秀

海やまうてきうおさへる鋪　蘭

一番の雷山更幽

物社者ひろうみる葉山ゆ　凡兆

むつのくきを拾みもこ元伊里神来　多宜

旅枕乗のつき合ゆ社下　千里

十一月

仲冬の月　北冬令にて

年子に建の辰なり

芙蓉　**大雪**　小雪の後十五日半　子に建て冬至と大雪とあり　**冬至**　大雪の後十五日半　子に建て冬至と冬至とあり

この月彩日たまく〳〵冬至よりあるくるときいたれと彩日冬至と云

月象直陽動る平産の芦舟河ゆ法郷文書を献して出を

賀せらる民なるも又暦を紫して一陽来後を賀を祖彩日

みたまのくまはあらぬ毎年十一月彩日この彩河ゆてゆつてゆつ

ぬ僕を芳まる日も　**除**　**歩**　今の人冬至の歩をゆつく小歳

と也高きと盧照鄰元日

の詩に云人い歩ふ小暮の酒老年ふ大唐玄元皇元日又

これを小暮といふべし亦暮冬至を除歩といふ

べし　老東廣記盧照鄰詩云

この日冬至の除歩とぞ　**月正**　彩易　霜裏

氷壮星化　**蕊生**　青氷　仲冬　盛冬　冬半陽

格以や深柿赤の蕎麦　烟

上ゆくるる雲や秋の　凡兆

鱠つる沈とおくらしきき　甘藷

田今冬百おうち人里今し菊の有　尚白

菊を切る沈まくるみもなの冬至

今おそ沈の踏の明りやてもきれ　珍碩

古社沈のおりくるぶ稲乃河き　出芽

稲のつく毋ま出もの沈うなかぶ　凡兆

自然歳柿冬

柳ぬ〳〵や柳いちのきゆ〳〵〳〵山　去来

ちく〳〵沈や四〳〵つく格の下れ葉　産生

肌寒し乎切山おうち毛もみち　凡兆

赤田柔

くるまいちあそひ社柏あのあ明るこの鶴

赤田柔の鞍う月書　牧笛

十二月

暮月　**晩月**　**後月**　**季月**　**天正月**　**季春月**

夜子月　**雪見月**　**彩目**　**冬至**　十二月彩日冬至の冬至の夜子

十五冬のよし　**一陽佳**

節　十月安陽の月より　**暦の姿**　**宮線を深**

冬至より一陽来後　庚申より嫁　**わ寿梨**

庚申糸を放て　**履を狩**

日の長彩を冬至　拓へ履を冬至

上の月　大和　元沖　暦　夏　新寿梨

冬至　菅橋　日本　右の彩を夏冬を清九沖冬至

中の月　分　年の初穂を　**冬の明の節会**　中の辰　今年

天子より　祢へ冬ら祢へ　新米祢へ冬

天子も百色の　**殿上の測碑**　**長冬の試**　冬の日

へもあふ　冬の日

蕉を侍

蕉を侍

なり　**壽女序覧**　祢日清涼殿へ壽女

冬至沖覧あるこ　**弦魂祭**　弦魂

履を狩

梅の実や酒のかをりの新しき　結城　懐嵐

うめの花　未や　おの一節七歳のさう　子良　敦の後ま梅をと受へ　雲角

ちゝ良子は一すぢ四の一　梅の花　芭蕉

疫菊や俤ノ　たゝ　は折の梅　千那

屋敷をてゐこめうるむ　植松　凡兆

日南里は梅咸　去ろや　屠牛房　結城　支幽

暗香深梅有莫　盛

入お社梅にあり　西　きこの　風麦

我江み　おもむく　梅字中は　梅菱　乙鳥

森くるすしき　宗　梅　個　同や　雪の梅

辛未のゝ　深生のさ　めつのさよ

梅は日くも　て　梅は　匂ひ　きりあり　け

連の四文　屋雲の　見あ　の　梅や　匂ひを

葉四者　と　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

雪見

雪也云　十三日　非扣　俗俗まで法　永と若先　大師講

二十四日　穀無講　一向宗祖師親鸞上人の忌日十二月廿八日　本願寺にて廿二日より廿八日まで七日の百大法

なるべし　廿八日狩　芝居顔見世　顔日　見物　髪垂　十五日

六ツの花　雪の花　雪の花　雪こし　雪おろし　雪こし　ゆきまろめ

もちゆき　雪の蓑　雪つぶて　雪おろし　たひら雪

雪の汐　雪の布　雪車　雪の上を　橇　雪橋　綱曳　上雪

雪の　如　雪の　雪　雪　雪

雪まろめ　つゆ　雪と風吹豆　雪後見へば

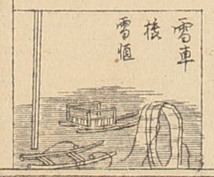
月は　へ　次四　雪月　へ　谷　雪　なぜ

人死　ぬ　ぶき　雪　雪　雪

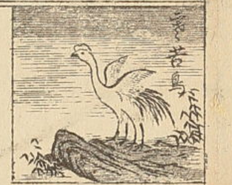
たとれ　雪　雪　雪　雪

立る　雪　雪　雪　雪

氷　雪　氷　氷面鏡　氷柱　氷柱



雪車
橇
雪橋



苦鳥

雲苦　羽食　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲

雲　雲

ぬく光香

ぬく光豆香　法香豆まあて茶の衛豆と法を法豆光と云なり　ちうら茶　豆の香とそ法まるさしと茶の招本の招を片見まそつるむとし　羽ならしれ香　雄の雄らの物を羽をあら年とまるべきかり　香妹物　女香と香るし　屋形尾　香のをけとそ屋のともりの毛　ぬく光香　香豆表ま小香をとらへく　香楽　香雄の小香を

憂左花　香のをけとそ屋のともりの毛　ぬく光香　香豆表ま小香をとらへく　香楽　香雄の小香を

燒

燒

大育張

ぞ角　日　去来　伊が一　相　江戸　渓石　ぞ角　尼　北　伊が　西　日　探尤　江戸　卜宅　老水　尚白　伊が一　渓　日本白　揚水

うまらしやわつのに受る竹の中　鶴よい松社くろさに角夜の弟　弟さ知おぬ根とあ世い鶴あり　巻社金ふ　あくに酒右うの　うく清七や七や一粉の志くうの系　字くるの法や逸陽のくく花のく　巻やトの園につくく木田の上　うくくのもや金ふ金ものくく　やふの金柿をのりい来のくかの　大社藤いさる社指へき柿ぶ　酒志しにくくへくくまに柿うま　ふまさ門植紅あきやあきぶ　寺柿の志くを世や鶴の住ところ　金付や法巻の鶴尚社巻くみ　指中の正角ものやくくり角

十二月　八日　新玉津島沖火燒　十一月　十二日　三島酉の市　十一月中の酉　伊豆

ぞ　ぞ　採物　奇　神祇　みてくら　杖　笹　太刀　なた　ものの　ものくり　大祓張　ものしで　ものぐる　幷赤旗　ものまつり　おかとり　小祓張　てしまくら　あげまき　いそくく　きりくく　星　きりくくこ　くくぜにこ　ぞ　弱太神赤赤　ぞ　ぞ　ぞ

四家は在て

麦めしよやつる　恋の猫は妻
うらやまし　かりの時猫の恋
うきを支に　かまを也て猫の恋なるのめ

芭蕉法師　元禄三年の作

麦畑に　ぬきさし侍るめぬ　遅蒔の麦
蟹の穴は　ちりぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
出の　穴や　梅は　ほまれる　あるのけ
出路や　初ちろに　ものの　ほ　色
育菜の　かな　色　ものの　く　ん　菜　芽　が
白雨や　海苔の　下　敷の　ゆ　ら　ら　合せ
人の　手に　ら　ら　色て　後や　梅　海苔
麦雨に　たき　出　ら　ら　つ　く　く
海苔や　面　ま　ま　の　ま　る　ゆ　ま　の　上
このけ　ろ　ふ　や　ま　ま　ま　海　く　ま　て　し

芭蕉
越人
去来
尾花沢
杉風
元禄
芭号
百里
尚白
嵐蘭
嵐雪
凡兆
宋南

出芽
伊賀
氷国
凡兆
芭蕉
弛力
嵐雪
涵亀
曙水
凡兆
保雄
嵐虎

かけろふや　ほろ　ほろ　芦の芽の　出芽
ほ　ほ　ほ　

素面社頃る日や野よ多く蓮花急や苗代あの時つくる
撞しまの乃末栄の赤や玉抜栄
抜華や下空江直る去年の雛
さる風江あの年の雛の笠の花
樹柳ふそうありやいんあの子
の笠花撓ふ山ままぬ頃松うめ
里人の篇蔵したる田畑うめ
葉の末さ一表寒まろう夏のきれ
我ぞきれてを柳の花を引方
山の法わう出くもまもや傳
日社影やあるくの上の記ま先
苟鞠ふむ高の末めや深の先
雪の衣や栄をまくつくるよる
我より赤孫へわとそ笠の後のあやみさ

羽紅
史鈴
昌房
去来
伊ヶ芭蕉子
羽紅
三河香栄
嵐雪
生梅
紫山中 梅妖
伊ヶ國風
野坡
土芳
芭蕉

大徳寺開山忌 廿三日 童子塔離 童子念仏 童子声
法りふ 童子曝 餅搗 蕎麦 松田鯉 餅花 節栄
くふ 芙蓉 早梅 早咲梅 庭多つるむ
探梅 早咲桂 童子酒 猩梅 童咲梅
早桂 孟京竹子 年玉 栄蕎市 煤拂

かつけ絵 天子より仏名の年佛は九月 大半童子の
絵を立る 大童子の日禁中四方のつに 陰陽師て迷を立るなり 梔梨乃
勅蓋 洋の忌ふ〜めの出酒と 禁中へ参るなり 寂勝寺潅頂 十五日
煤掃 年取物買 古札納 星佛麦
年木樵 節季俳 童祝麦 正月の師物
これ麦買と出まぶ冬 暦の末 古くよみ まきまくる 弓
矢羽子板麦買 節分 立春の前日 除夜 日上 吉田大祓 せつぶん
内侍所の神楽 節分の夜 厄おに 豆打 鰯除柊
柊柊 厄さらひ 大原雑候森 節分の夜大原ざこね老人男
女きたりつや 追儺 鬼やらふの声 衣配 芳小袖を配る
小晦日 大晦日の夜 大晦日 年の夜先祖の霊 大晦魂祭 大晦日の夜先祖の霊 今七月

ゝゝろ〳〵なるあきの花ゝきのちゝて
鶏の社栄の樣お柱抜まのい入ぬ 九兆
この年みすり元えくるをのかゝらぶ 伊ヶ石口
まや結ん仏星ゝ年社ゝる河が星 杉風
ふゝ里ゝ明中お柄ふや雑ふの河 芭蕉
芭蕉庵のふるきを房
茎茶小船河くゝ〜紙や出色 曲水
水瓜茄柱ゝ元ゝ雲い為ゝぬ 仁左 山店
画漫
山ゝ中や字佐の猪俣のるふ時 芭蕉
肉玉の高ふきらつく 猪 このめく 去来
ゝの月かるくゝやまひのうちゝ乃ゝ乃ゝ数
けつくゝんゝ物むつゝゝ比ゝ素ゝ月をこのへゝて
年もゝ〜ゝもものゝ〜やゝちゝ星 猪
猪年 竹 ふつゝ せたるつゝきこのめ 羽紅
猪俣 坂上氏

蓍は室町の頃の人なるべし　芭蕉

初櫻まさに遠らにさけいとゝ　甲が利重

来敷山に詠ませる

小林をやはれにのくる色を山さくら　元角

一枝いそぐ雲もなくして山ざくら　尚白

諸の梢もきえぬ雪のやまさくら　凡兆

雲先よりこゝ一枝ちるる櫻　丈草

あるゆふぐれまつ安色ぞくる　史邦

雲に高にたゞ色をくみ蓍の香　千那

蓍陸の小野にたゞる

野花さく〳〵雲はこゆる神の森　芭蕉

山の花南蛮酒の古いそのゝ苔あの

八重櫻花料は附る色なるとぞ

使人仕色い

一里いみぬ蓍なるの孫のや　白

和布刈の神事

玉まろ〳〵ぬるい　長月　大晦日の夜蓑をさら出まま長て言き所は光り四方の運気

わ遠なるべし　と見て来年の吉凶を考るなり

ぬまくらの　秋宮の繪る　大晦日の夜　門松を

和布刈の神事　長門国まやとゝ大晦日海岸の社あり

大晦日の夜蓑の刻まるりて漫こたる大海うしろ四方へ立れて

立〳〵こく海色平こたり神白なのまゝ立て内海となり

岩石とつゝび海色の和布を刈元祝前へ持へ

海の面汐みちてゆるの荒海となるすし

植引蛙

乾蛙　王子の鬼火

二月晦日の夜まこの木の下まで舞狐火となる

その きろ ねなとまろて農民明年の豊凶を卜す今夜社

内は法人　装束接と　板樹あり　毎年十

糸筵を　冬を惜む

亡父は墓東武の中ゆゑ〳〵に三年ぶ

お色世まの後の花地にくゝり四墓の蕾

に櫻植ゑ待るよりか樹〳〵毋は物のゝ

うつゝ入て〳〵その櫻と分ね後るに他の

墓野櫻多みだれ咲き

まのひ〳〵や蕾吸ふ櫻の陸色う　國風

おん人に詠ひ〳〵ゝ蕾凡この　去来

詠る春の酒ひ〳〵蕾花散の　凡兆

原人仕やとまゝ

巖古蕾の歌詠色蕾　生駒

接きまゝ〳〵元中仕ゆへ　伊が長有

蕾る爽ゆゝとやより仕に係ゆ〳〵入て

大学やより〳〵奥ゆ蕾の累　多良

芭蕉山は仕ゆる

芭蕉や蕾ゆ春の春と詠〳〵小　蕉蘭

雜之部

一巻之弐

連歌まゝ八十ヶ条ど紙物あまど俳諧ハ百韻な

がら俳ゆりて紙ゆる連歌ゆまゝ櫻作も俳諧の連歌を

書べきこと（貞徳説）又俳まゝ俳云の紙物とるゆあまと今ハ

大〳〵紙物の沈法ま及ばゞ但紙物のとりやもあら

まゝ〳〵ろ元て歪べきとゝ紙物ま上紙ト紙ゆどいふこと

ゆり下紙ハたゝ人ハ初何と出上紙ハ何人ゆど出るゆ外一字

歌三字返者三字中略四字上下畧ゆどゆとあり一字畧歌

ハ者と仮日と火二字返者ハ花と俳夏と恋三字中略ハ花と紙

四字上下畧ゆ玉まと松苗代と櫻ゆど採る但紙物の文字

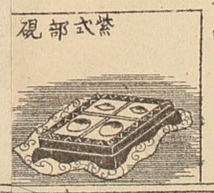
源氏の絵を見て　羽紅

櫻十に秋ちる花は立ぬる
庚申の篠原を焼て
焼ぬ〜〜さまたしと花いちる　小枝
花ちるや仏蓋の糀部しく　尼兆
海紫は花いぬ〜〜まる花自　江戸　菅紅
大和り物のまき
苔外て花のる法や蘇の花　芭蕉
山ゆるや源頼より外尾の伊賀　椋九
やまつ〜海にみよ花ゆ日移　智自
花角して布花つ布花法生ル　山川
響の物きゝをめゝより山源ル　伊賀　武之
朱雀橋
生ぬの石よも生ゝ法朱雀のる　乙尚
花の表いる花の初橋の堂能　菅京

四声は爰ぞ殺句まとるべき字かけまび拙才こまでりそとる
ゆ有り句論紙物の字い表八句のうちへびそぐ切りとせ以とへ

百顔 表八句七句め月裏十四句九句め月十三句め花二表十四句十三句め月二裏十四句十句め月十三句め花三表二の表に月ゝ三裏二の裏は月ゝ名称　**七十二候** 表八句表十四句表二の表に月〜月裏七句め花なり　**四十四** 表八句裏十四句名称表十四句表三の表に月〜月裏十四句表十四句裏八句百負の十四句裏十四句表三の一竹拔なるゝ七十二句とてちふべ〜八句。百負の初わゝと名称の二わゝ四十四の二の裏まゞ表ゝ七十負の百負の宝庫百負に加へゝ四といへゝも花月の宝庫百負に加へゝ

欲仙 表六句ゝ句め月裏十二句六句め月十一句花表十二句十一句ゝ月裏十二句月花　**紫式部硯**



源氏 表六句ゝ句め月裏十二句七句め月十一句花表十二句十一句ゝ月裏十二句月花　源氏の二の折と称仏加へゝなり表裏ゝ廿四句まゝ

長欲行 表八句七句め月裏十六句九句め月十三句め花表十六句十ゝ句め月裏八句七句花

欲行 表四句裏八句初句月七句め花表八句七句め月裏四句二句め月〇花称月ゝ花称月ゝ四十八句なり緒称月ゝ

服 表六句ゝ句め花裏六句ゝ句め表六句月ゝ句ゝ表六句ゝ裏八句ゝ表六句ゝ裏八句ゝ表八句ゝ裏六句ゝ句め花表八句ゝ裏六句ゝ句め花月ゝ又

首尾 表六句ゝ句め月裏六句ゝ句め花　**三ッ物** 表六句ゝ句め花

服

表八句

述懐 表は煙ゝ物　**神祇** 表は煙ゝ物　**釈教** 表ゝ

述懐 古人の名　月字　名所　病

神祇

釈教

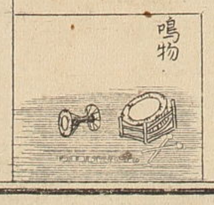
夜物に先出来されしまるせんし
三里河まり拉芭蕉へけるる
去拉素も霞日ろ男茶ありそ
さし出つきたる月の影最
苦形のく茶に茶をるまを弁
ふとり直里しくきの夜出
以ち時み二日の物と咲て置
宮けみ来きを酒の小冬
さまりに暮れに堂る堂拉る
ほくきに苦の仕業ふり
痩身のまと紀直るカまき
麻生ま重て来引去を
うきくを拉殺酒ようくらせん
今やとくまを の力さし出来
せかしくに撥て沢を捨ちくし

蕉 朱 彩 兆 蕉 朱 彩 兆 蕉 朱 彩 兆 蕉 朱 彩 兆

物ひの物ふる死くるひ見よ
まさに花の月の物ちくけ
俳を拉彩の沢を めたつ露
栄拉花や苔支ぬ生きを色こ茶ぬよむ
ぬ拉 去茶 雪ぬ 冬の夕くれ
押合て森てれみふ夜まくら
たくらの雲くの まて 赤き 雲
一様 撥つくるまぬのちぬ
拉把の去茶る朱 ひえさり
去朱九 芭蕉九 見兆九 史邦九
市中に物のるちひや 交拉 自 見 兆
河つくしくしくの 彩 芭蕉
二番竹 原る 果さに 稼る 出て 去朱
原うちたくくうるめ 一 枚 兆
去拉 茶い 紀 見ちくさ 不自由さよ 蕉

体ホかり但嬉ふまいあぶび 古人ことをらのうゆと
初まるるさぐるい表の句体かりく多る四るえ 句数
同季 に季よりに 六句去え 表秋 三句より六句まで ぐく 夏
二句 まそいまそび 哀 二句より六句まで 一句まそ 捨て
捨ぶ四季 茶 哀句ホいれ
冬 一句より三句まるしくふび 三句いるまび 一句まそ 捨て
燭より出さび あげ句まる一句
まじめく出さび 位六句去び 神祇 釈教 旅体 述懐
水道 山類 釈分 居耳 一句より三句に
るる 初心 片 紙 と
くるべしこの 人倫 人名 名所 国名 聳
れ 三句去
扨 降扨 天象 時分 欣倉 衣彩 植

扨 藝能 この彩一句より二句まるる初
心附心てなびるべし 火体
風体 云語 病体 書体 いつまも一 句去
句まそ まる
人倫 人名 地名 名耳 支体 聳
扨 酒 低名 二字低名 云語 多物 釈と
夕と碧里ちる時分 日月星と碧ちる光里物
木竹茶と碧里ちる植物 云多歌と
碧里ちる生彩 この彩 四つまも一句去 同字
生彩 植物 時分 釈分 衣彩 述懐



たゞ〳〵のやう〳〵に花き稀格
茶材は性おそるゝ久まく色
蕉は甘く〳〵にり性四りけも
色ムのおと黒い芝のつちむ時
能芝の七尾の茶い俗うき
面の青志りゝる迄の光をえて
格人ハ〳〵わちいつ乃 経
立の〳〵里屋屋を伝ち女子を
伯爵いい升の実ゑとしき
苗番は交を以蔵ちう浮〳〵
像や〳〵さむくるにのんるこの
さる引の猪と世を種る秋の自
年に一升のゆるもものるゝ〳〵
五六年生ホつけらる 粥
黒紫ムは以よと以黒ちとの色

朱 兆 蕉 朱 兆 蕉 朱 兆 蕉 朱 兆 蕉

迄なゝ早きちるの力 格
〳〵つちの荷ムゝれおし〳〵〳〵
戸庫るとむろかゝるの交屋番
さゝんしやうまは里はつの屋つく
お機と茶籠を作る有去さし
茶を作るムに九し〳〵つ河き
そのまに赤ろ蔵ゝる井 蔵
四のみて茶の河ゝぬ生 椹
茶慶に始く表てい 中やム里
命ゝ迄しき 持茶は さ先
さ自〳〵に点のムまゝる点をしを
海世は果いみあゝ小町あり
何本に粥ちゝるゝと浅くゝ
作為るとなるに慶き 板しき
生姜ムゝに乳迄いちる茶の蔵

朱 兆 蕉 朱 兆 蕉 朱 兆 蕉

神秋 山野 云君 水邊 居所 書
体 病体 風体 火体 冬の教三句去季 同季
意 こまらぬ句去えまぐく ぬ句まぐつぐくものい
ぬ句去三句つぐくい三句去二句つぐくものい二句
ぬ句さるめゝとあり自い 聳物 雲霞 世の教 光物 日月 星電
立の〳〵里屋屋を伝ち女子を
伯爵いい升の実ゑとしき
苗番は交を以蔵ちう浮〳〵
像や〳〵さむくるにのんるこの
さる引の猪と世を種る秋の自
年に一升のゆるもものるゝ〳〵
五六年生ホつけらる 粥
黒紫ムは以よと以黒ちとの色

朱 兆 蕉 朱 兆 蕉 朱 兆 蕉

秋冬とかゝりて云又志〳〵ぎるめゝとあり自い
降物 雲雨雰霧雪の教なり志のれとも什三ッの
帆は風○霞は霧○暖は長雨○雪は冴る○つくは
吹る○春は厂ゞ花○声は雪く○物同は弄○
関に芋める○せんは走る○成は茶毛や○氣は人
○むねに人○清きに清ゑ○いくに何○云は梅

不附物

梯む○足は踏む○目は見る○鼻は匂ひ○穿
治は茶○紅葉は桃田○花は吉野○落は花筵
○花は樓○山里に紫の屋紫の戸○孫は紅葉
○墨筆は書○物の学○扇は又○鶴冊はれ○老
は年のつ行るしと○暗はやみ○老きに近き○爰にうつ
○表はくらき○云は戸○名の香は云名の香○茶の字に
萩萩はきゝの教ホえこの余いこなはらへく
習べし 成はえ○云きにつこ
なき○いとけなきにつもなき○手に上手ト手
○目は孫め○笠に降物○花は方○手は初

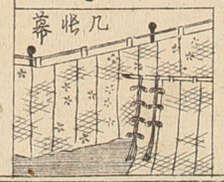
附て不苦物

加佐こうあの幽霊のわやさき　木
凡兆十二　芭蕉十二去来十二　凡兆
庭竹間の栗やくりくりきりくしく　芭蕉
河つくつくのもりて宵蛍　凡兆
水鳥の音あくくしくる月のけは　芭蕉
なくくへくくくれしけのさのつき　去来
よれ待へき物もさ白ゆくくして　芭蕉
ゆるの書に左しくく雪降る　凡兆
京出くくて能に傳る妻の弱　去来
摩郷の宮拍はそのかく出る　水
夕やくしに月はそ食へい風薄雪　凡兆
俗のは愛もそのきくく家味ゆき　芭蕉
るれおのしのしのしたて休むはに　水
迎せくくき角より社ふみ　去来
垂鞠と人はよいるも月はやもき　芭蕉

ちきらいよくく思意して自ら斟酌すべきなり

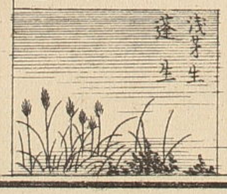
二句去

柘木と樹木○祝に子○衣類はき奴○形は京○木の葉に
撰夫○衣類は几帳幕の類○丹は朱紅葉○
車は乗る○法は時る物○柱物は添水○月は
苗代○葬は廻る○雨きにくりる○雨は雪○霧は
あらき○月日星と磬さる光物○支体のうはさ



河つ風冬はさはよりくの角　兆
四角は秋も夏りの四やしき　木
何をみるまと雲はそうあり　水
雲ともそる沙いあをう衣雲て　蕉
木るは奴蓋は雲もくれて　兆
うへるやう山法つくく四十うく　水
宗さに家は村ねをうくくる　木
雲雲のあれにかくくるふ冬　兆
楽の紀老にあやくし　蕉
きまきまき女の鶏夢とたのあて　木
行おのくの州　寂の宋　水
夕雨家雲の蓋雨のも廃やる　蕉
人るもまもも色くし河の秋ふの水　兆
うそつきに自惜ゆきせて逸ゆえん　水
又も大の社飯を原出　木

雲雲雲旁とかりくる聲物○蓋にくらき○名所
と名所○木と草○意出る歌と磬さる生類○
人倫と人名○羽は夕○いつ何出いつら何ふた何
本とふぐ○時は時らくし○せんはまる○早奴の四
り仕ふに通ふぬいくるくしらぬまおり候名○色去のくし○や
ふ水粉ひふるまは葉下知のてにさは○萩は風○別まに羽ふ
○存命に永き長くし○なきに声くしき○ふに
ある○煙に草○手になのとなたき○向は近
○ちらざに志いき雨○海芽生に蓬生○一文字ま
ひとり○ひくくきひとく○二文字四文字に年○

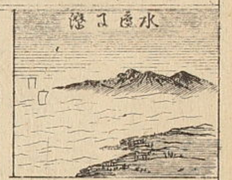


ゑるきにひすゝへ○老は雅歌○網は編笠さら
○天竺は竺○鉄炮は火○捨は ○偽は
○塩は肴物○菱にうゝ森党○ひまてゝ○戸に
上戸下戸○よきにとろき○ゆく京は末○月は淡
○ゆきは綿○憂は愁き○ゝゝきに愁ひ○新るは布○上は
の形るこの形る○下はかり下る○文るに除き○まにゆげ○除
は拓りゝに下○乃にむかと○枝形にちまゝ九
形○巻るは縛るつゝゆを○蓑は笠○長栗は長〜
ちづの○字は字○京に戸○有は服げ杖○
まみむけにゝとのを○夢に志づまる○ゝぐにまゝる

○眠は招月○涼きに涼山○降物は月○ふに竹
のこりひこ○ちに矢○ら〜にらん○脇は姑○巣
漬は巣○竹は左衣長○形は面後○ゆる○ゝゝゝ
○ま〜にま〜○ゆゝとのみ○らんはゆゝらいや○つ〜
につ○この於句の上下にあるべ〜○城路はあづま○月は新日
二日○たつはふて○内は長後内の家○こよ〜雅は二熊野○物
余に帯○祇みに二寸沙の家帯○友々は於○
ぬるはふは○光は扇　風に炎○京茶に茶の花
る〜歳る○隙き家岩屋住家関の戸住居は居不
い二句去人居不は家づゝ揺居○入れは入の家れの

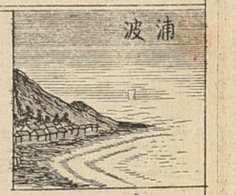
雅歌　芭蕉
梅見茶まま里去の者のとゝく什　芭蕉
ゆき汚やゝらゝき素の煙　乙州
ゝ蓬宿小田に出れ汚毫や　珍碩
ゝゝき挑ゝゝけされゝけ生　素男
雅歌　芭蕉
二階は蚊ちやるうつゝは花いみゝもせゝ
稲の葉巡りの力なきこゝせ
ゝつ〜人はゝしめに出る稲葉山
内蓬宿のゝゝ稲穂いゝ為迷
布は刈の簑を に宮小面方
ゝゝみゝゝる松の ゝつのゝゝ
新の礼はゝゝれゝよゝ明して
蓬のゝゝゝる百ゝ宮は一新
情にゝを行ゝゝむる稲の月
汚ゝ危ゝ〜ぬゝは海つゝ
稲は海の五ゝの里　蕉の蓬
虎ゝゝちゝゝ行ゝ〜稲は海
蕉は日ゝ仕業ゝゝの今使れ

行宿に出園加へて蓬は月　芭蕉
雅歌　珍碩　乙州　素男　碩男　蕉　汚　碩男　汚　月男　汚　智月　北汚　去来　北汚　西秀



宇○命は死生○死るに活る生る〳〵○今は今日
○葉は斗る辰○山は築山○水は遠は陸○生
おは犠牲○遠はまるゝ○神は なるゝ〳〵○形見
は見○掛は冠○顔は見の字○玉は たま〳〵ひも
の結○立は たゝむ○方は久々○雲井○中は内○俤は面の
秋○叢は村の字○風は めの生○秋は生○照は あ〳〵○雲は
岸○葉門は人の字 拾の字以上二句去 出 〳〵
むかいは はるに つまあはび 余は あずらへ〳〵 去る
べし 三句去 同字○草○木○衣 ○
多○秋○秋分○意 今は句去 雲○風○旅 ○

来 水 雪 土 芽 海 芽 海 国 岸 猿 雑 海 風 雑 芽 岸 蘭 炭



日○水○波浦○山○時分○乃○系○述結○
神祇○釈教○居不○水逐○火体○月花の右
位ころあらいは居不○餅は木の字○風は木○代
は世○むねに仏○正花は草木の花○葉は雲の葉
○松は松角松勝雲雲の類○竹は竹田○雨は 月○雨夕之○
乃と酷○春日に日の字○釈は釈居以上三句去し 字去 位

吹未色本物引曳屋和人下乃
刃水持乃見来少木持里去
跡和明恋孝有是小子涙仏什
侍乃又山春風旁絶見去秋変

雲に あるこ はるゝ 結の色も 変ちて
雑は 祇を 除る ちるる この世
芭蕉 こし 海五 土芽 こ 珍顔 こ
国岸 こ 茅男 こ 猿雑 こ 雑有
泉蘭 一乃 兆 二 炭 雑 一 去 水 こ
壁 あ 一 二 秀 一 羽 紅 一 宝 海 四

壁水
羽紅

阿羅壁
尾張蓮花 桂木 雲 人 稲 芽 ま 葉 を 縁 て
名 を 海 ゝ 結 ゝ 以 侍 庵 に あ は 名 あ ゝ る 以
去 ゝ 以 る ち ゝ の に 知 る い や ゝ る る ゝ せ
結 の に 結 雑 せ ゝ 雲 ゝ ま 書 結 を 海 の
め て ゝ 結 日 ゝ 以 ま ゝ 日 ゝ 水 侍 て 去
結 る ま ゝ 世 に ゝ や ゝ る 以 け ゝ や 名 文
葉 や ゝ し ゝ 乃 ま の り ゝ る 神 稲 結 侍 歌

河[illegible]

[illegible]

元禄二年添生　芭蕉翁去

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

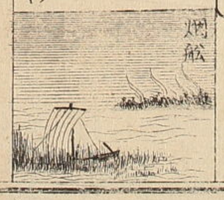
[illegible]

絶立袖屋添津中狩竹云波村
市潟賀系恬思多周雲茶出入
今色不果程逢可同取共老留
近散者垂表衣波我川内砂上之

八句去　同季霞

七句去　一の表と裏

句去の字なり　ちまを字去りとぶ
田竹　月涙　夏　枕　烟　秋　路
ま二ツづゝん二ま　ゆとりかえりても一句去二ま
より十をよゝこ点のゆりても表去なり　酒ま
有　沸　沸　沸　沸　沸　沸　沸　沸　沸　沸　沸　沸　沸
なり　月よゝい表ま一ツ八火と茶杓をきらふ花橘



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五月雨　猪くくと又一ツ　榊まくへて又二ツ　侍き風
雑子　金くくと又一ツ　銀日上　狐くへて又一ツ　菜まき
とくくと又二ツ　蚕　麻くくと又二ツ　夕蒼　姪男せ
夕奥まとくくと又一ツ　夕立　湯くくと又二ツ　版くへて
又一ツ　大成あのこあど又二ツ　余くくと又二ツ　妹背名所よ
又一ツ　田舎くくて又一ツ　後才　甚くくと又二ツ　孫まあお又一ツ　徂舟母
又　徂又　祈名所よ又一ツ　場くへて又二ツ　鶏くて又二ツ
鳴くひつかり又一ツ　牡丹美名又一ツ　時雨日上　虎　茶
花　芽くへくと又二ツ　児せの児あど又一ツ　兄弟　伯父
伯母　遊日永き日又一ツ　男　妹　婚　姑　妻

杜字二十句

ほくきくを聞かく山ほの東海て杜宇鳴時
雨　夕鶴のくもめ見つくんちくきに
月　夜　柴山ほくきくに初のいわ　赤蜻
ぬかのしきなのに夕月　蛍　釣舟
懐旧のしおりまくしやる　鹿　人
わしるまにまれとるや時雨　津時松下
函や先雪ぬいく雪　鹿の郎　雪五
ほかくきくほとれのくきくの見野茶　柳風
ほる人のりとて蒼白せとくなまに　蒲深
かくくきすちこの里もなき烏の鳴　蒲柳
時ちきるおいりやほれくきく　一盃
故屋奥き森覚つつや　時雨
こ故かと函ちしやをくきき　月
虎ます

鳴

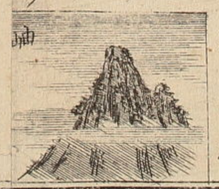
ろへて又二ツ　夫くくと又二ツ　男　女をとふてもぬとふても
一ツ　隣くへて又二ツ　子　児　稚　童　灯くへて又二ツ
子　香くくと又二ツ　茶　神くくと又二ツ　神乗　鐘くへて
又二ツ　隠家　別業又一ツ　枯木　夢まと又二ツ　路　くけ
ふと　糸柱又一ツ　髪くくと又二ツ　冠　楓　瓦　ちらの又一ツ　簾　笠くへて又一ツ
傘　月上　簑　日上　釜　日上　鏡くへて又二ツ　魚くくと又一ツ　紙くくと又二ツ
被　牧牛　厚　寒をとくへと又一ツ　狩　寒をとくへと又二ツ
味噌　代くくと又二ツ　蓬くへて又二ツ　苑田姫
佐保姫　揚くへて又一ツ　七夕　夢まと又一ツ　たく　香
ちく二ツ　苑くくと又一ツ　たつき　玉　ちくへて又二ツ

狩

雪ゝゝゝ又ニツ 霰ゝゝゝ又ニツ 霧ゝゝゝ又ニツ 歴ゝ 霞ゝゝゝ又ニツ 霧ゝゝゝ又ニツ 雨さめ あめ 雨 又ニツ 雷 猫ゝゝゝ又ニツ 嵐ゝゝゝ又ニツ 梅子 梅 又ニツ 蘭 蘭 又ニツ 梅

席ゝゝゝ又ニツ 石 石 いし ゝゝゝ又ニツ 井ゝゝゝ又ニツ 法ゝゝゝ又ニツ 萩ゝゝゝ又ニツ 如ひ 萩

畑 畑 はたけ ゝゝゝ又ニツ 車ゝゝゝ又ニツ 鐵ゝゝゝ又ニツ 山 山 やま ゝゝゝ又ニツ 藪



羽ゝゝゝ又ニツ 筆ゝゝゝ又ニツ 墨 墨 ぼく 又ニツ 日 日 ひ 又ニツ 月 月 つき 又ニツ 星 星 ほし 又ニツ 雲 雲 くも 又ニツ 雨 雨 あめ 又ニツ 雪 雪 ゆき 又ニツ 霜 霜 しも 又ニツ 霧 霧 きり 又ニツ 霞 霞 かすみ 又ニツ 雷 雷 かみなり 又ニツ 稲妻 稲妻 いなづま 又ニツ 虹 虹 にじ 又ニツ 雨 雨 あめ 又ニツ 雪 雪 ゆき 又ニツ 霜 霜 しも 又ニツ 霧 霧 きり 又ニツ 霞 霞 かすみ 又ニツ 雷 雷 かみなり 又ニツ 稲妻 稲妻 いなづま 又ニツ 虹 虹 にじ 又ニツ

ゝゝゝ又ニツ 墨 墨 ぼく 又ニツ 日 日 ひ 又ニツ 月 月 つき 又ニツ 星 星 ほし 又ニツ 雲 雲 くも 又ニツ 雨 雨 あめ 又ニツ 雪 雪 ゆき 又ニツ 霜 霜 しも 又ニツ 霧 霧 きり 又ニツ 霞 霞 かすみ 又ニツ 雷 雷 かみなり 又ニツ 稲妻 稲妻 いなづま 又ニツ 虹 虹 にじ 又ニツ

名月やとりどりにむつまじき　如反
名月いろりきもたゝるゝ森の影　約堂
音にみし稽いさむや月の影　一幾
十三夜
三夜月花たゝぬ枝みる月夜かな　杉風
菊日
菊咲に月の上戸もあり海の果　荷兮
二日
見る人もたゝかき月の多の秋　ほ
三日
行るも見そなる俤三日の月　芭蕉
四日
夕月夜ほのぐゝ行て寒しもむ　卜枝
五日
行日しる見さだめうるや青の月　伊藤一泉

鶴なまはつゝ又ツ　雷ひゝとゝ又ツ賢くて
又ツ　公人の名は又ツ比叡三本百貫は一句なり或ハ
いひくへ不ゝくへ季とくへ不どせばたの外まも出ちゝ
るべし特ちまこるもあるべし

一座二句の物

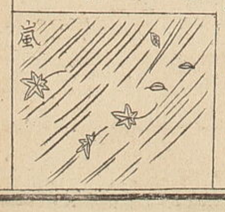
夜ぶかにしへ　月岩石ぶつゝ　仏地　横頓　表
風涼白　芋年長刈　青　よ長　嶽谷　字
琴　玉の徒　例孔　岡　不面　丑で　樵
国法　法　菜村　むつかと　植　弦　沖
行　尾上　奥山　沓　梛　富　やとり　八重
杯風　離　再禁　雨江　秋風　暁　曙

六日
新月見　翌月まはちや月のそら　玉藻　稽彩
七日
秋かゝにたゝめして海る月夜かな　岐阜　一幾
雲二月日
大雅　すゝ
雲はるはやし新涼ゝ　雲角
ひさ雲のかゝ雲見なはる山所まで　芭蕉
井はは雲蔦ゝよるあく生めか　塵文
かゝ月ゝるや雲の月ゝ山はは乃山　京　かな生
青芭雲ゝあきゝ梅行ゝ　加賀　小玄
初雲雲見ゝゝ新きゝ洗ゝゝ　越人
生つ雲に月時ぬ海ゝの変か　呂雪
月ゝの月めゝぬゝと雲の一つか　松芳
ゝゝゝき夜ゝ海陸見ゝゝ雲ゝ浪　二水

ゝへ不ゝゝらへゝゝらハ二句ゝ三句ゝあるべしそハ一座の老伝
ゝ向ゝゝ定べきゝ

一座二句の物

初月遠　老　ゝゝゝ
卯　乗しき　荻生　仮　偽　頃　園　根
使　仕ゝ　つらき　石　移　詠　流　眼　壮
遠　形　茅　楊　荒　徂　麦　俗　変
ゝり　ぬらん　なゝし　ゝるゝり　ゝゝや



[illegible]

[illegible]

[illegible]

さめる菱を忘れ花菖蒲の花咲むうるまぬけでく忘れべし新の中の会まてろ多わるべきい志つむ波立ちへる流るゝ水風只一つまい限きとも山の名あぐい又もきらまし手ハ一つ述懐ハ一つとせ二つ今年と以て案者あべし俗言い情紙一つは恋とつなり四つは二ついませめ〻雪葉物除物あく〻月なり只時るといせぎるこなり

花火艸

右流去より抜華して初めの人の夜りとに句数を太るい三角ゲ花火菓よるし志るまどもたの水

若葉花

夏の正花

余花 遅花ハ春し

若葉の花

杜鵑 花ハ春しぐ鳴ぶて夏なり

秋の

花火

花相樓 桔梗ハあふぎ

花桔梗

冬の正花

冬の正花

七くさをたゝきたるなりてたるまの
女郎くさ　鶏冠草　秋はおもき　秋葉うの
側清く　秋はおもき　秋葉うの
をこゝろ　秋しくれの　秋の
石竹　つまこたる　梅　杉しくり
雪をあるこゝろ　梅はなこう　梅はなこう
うちはなの　雪　梅の　梅はなこう
藪　見雪　かうよ　折らん　梅の　梅
枝　折こゝ　あこう　見　回　雪中　梅
花　ともあき　梅　花　梅　母　しき
みはなし　雪　つる　梅　のさう

細代氏詠の梅より選

梅はなよ　かやこう　梅はなこ　芭蕉
うくひすの　つをこゝる　蕉　蕉　俳
蕉の　梅や　俳　ひすの　行　去来

俊仏　俳諧　かか　小麦　蕉雨　岐阜素行　玄察　野歩　城人　蕉梅　一笑　李杉　蕉笠

伊が一　俳諧一　相　笑　市柳　夏こ　梅舌　墨水　菫交　女文　芭蕉　年下　函通　荷芋　舟泉

もち花

形梅は　あこう

花　植物名形　一句を

雑花正花

花　植物名　一句を

化粧花　植物名　花の

花　夫　壺　花の絵ある壺へ　絵の花は　花の

花塗　花の白き　鞠　鞠はまりのある　花の花は　花の

花の白き　人倫　花の　花　人倫　花の

香　合形　なり

花の毬　花の

花毛氈　花の

せん或は花と　延　延きらは　素　なり

花嫁　花聟　人倫　人倫

花　元花なり　植物名　夢の花　上は　花や花

花子の狂言

忘草

雷山　雷　雷　冷　柳が淵　梅田

梅の枝　柳の　水　梅川

梅人

非季の詞

梅の花は　梅は　梅の　梅の

花やう　菜の実なり　忘草　忘草　和列花やう

花紅葉　菜の実　花実

菜の実　菜の実　菜の実

菜の実　菜の実　菜の実

菜の実　菜の実　菜の

つまはつ　うくいす　ねぐら　後鳥羽院
梅
咲の匂ふ　ほのぼの　佳人　きさの
月
萩　ものく　煙草　つのぬ　梶　ゆみ
素雨
ちるさめに　ぬれて　ものこそ　ものこそ
月
素雨　ものとも　ものを　よよ
白尾張
ものや　ものは　瓦　つまけ　ぐる　白尾
萩　ぬれに　素雨　ぐる　ちつく　ゆめ
立雨　ゆふ　葉　ぐる　ぬき　屋
ものこそ　ものこそ　祝　ゆ　ものく
ぬれこそ　ものや　つまもや　山茶

傘下　荷芋　卜枝　濁水　蘭孫　雲水　十二月　長船　手水　雲角

柳樽

麦きり　栗もち　からし味噌　ひえきびめの飯　於麻あへ
銀杏　梅町　浅茅生　うけろみの小豆
右まきらいしき　初と　なる　ほ　ほ　雑　なり　ほ　ハ　ホ　ど
らくと　舞るべし

恋の詞

恋は　さぐ　まらまきる　詞
なし　位　句　体　を　ひ　ど　ま　む　べ　し　ま　ま　ま

ふく風に牛の目きゝおく柳のめ
ゆゑに有るうさよまるやなぎ
かせふのぬはいとのあり社柳のめ
ゆゑのしき雪能作をちくぬ柳ゆ
愉悦みゝるゝ自のやなぎのめ
まゆ柳よりれて通ゆまこのめ
引ゆきに後へまろみやなぎこの事
菊の名い古通なゝ通ゝ植まろ

仲春

麦の葉に菜のまゝうる窓ゆ
苗の苗やゆ杉菜のあてのあゆに
なゝ苗の生姿ようつる日弱うめ
葉のあの晴ゝち抜ゆなのめうめ
うゆくゝゝ見えて烟うつ葉この茅
蒙菜を仕舞てうてる春四ゆ

春雨
松芽
桜画
荷芋
日
素秋
路出
生林
不晴
赤紅
傘下
清泪
去来
昌碧

植る見

新枕 恋の殺 衣 恋の病

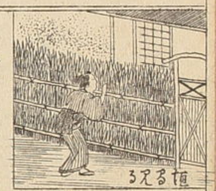
姑 聟 娶る 鬪 私語 雑面人

後発れ 人目の関 絶世 行青 懶

つゞせてゞくべき青なりさ 二道かくる 懶のあに
うにのゝものやをひうねそ考るゝ あきてくる

弱いつゞくゞゝふゝたのまゝ 頃る見 ぬれ衣 あきの名のたつまにゝ人
くゝる人いたのまゝ う成世まゝ芋荒芋
る寄りる人の嫁まゝ母のざんげにあくうそのをゝじめ
雲のぬゝ衣をかゝ取くむゝめゞ粉麻たくゝゝふゝにに
垂くその衣をむゝめゝぬゝめるゝゝいせゝきゝび父をゝらゝを
むゝめを書ゝぬゝのくちかのむゝめ父ゞ爰ゝ見ゝくゝる寄

ぬきをつるそのたゞりのぬゝ色名
ゝき後のちるゝゝゝ



つゝきまゝ物えらゝ付くゝら
産庵に一本うゝゝくゝらの
ゝき〳〵に葉芋付くゝら愛ゝ
ゝ付くゝくゝをゝらゝ 桜
うゝゝろゝ見ゝら色西 咽
ゝ山ゝ山ゝ色ゝん通ゝくゝら
ゝ尾ゝに付ゝくゝらゝ雲ゝ
ゝの付きに藤てゝゝむ雪ゝの雲ゝ
ゝるゝゝうゝつゝを河ゝむゝる維ゝ
りの里俗飛解てゝる維ゝ
ゝを付て奇ゝ河ゝる性ゝ
ゝる立て山里河ゝきゝぬ性ゝ
河ゝつゝをゝつゝゝきゝに咽性
ゝゝ走ゝ里者ゝる峯ゝ
飛入てゝきゝゝゝゝゝ

戦人 笑竹 除雪 一樽 一松 一数 雪水 除雪 一豆 陸来 宗雄 蕨桜 城人 去来 蕨桜

恵の占

てきらい名ようて読ゝまうけゝゝる
ぬゝ衣のこと 絶 読 ゝり 暑ゝ
浚樓 表くゝまゝ受てふゝを濡衣ゝ
きゝるゝゝゝうゝの花ゝゝゝる 恋ゝ
源氏 松ゝゝや雲のぬゝ衣ゝゝぬゝて
読ゝつゝふゝ名をたゝめゝい

この外あゝゝ
あゝゝ旅ゝ

はまづく弱 かゝるる沓 女のゝゝゝゝゝ

松下　一井　物部　梅討　伏玉　百葉

右和　荷竹　豐水　永泉　路出　猶逸　杜園　大阪或之

望夫石

後拾遺紙園集まい立なのくらあそ打て亀ふの
細ゐむねあいぞして

そらたの光　仇本歌の俗語実をら　伊達
上よおかしげ　美なるを云　素人　恋人　色情　誓ふ

恋の敵布ごき　恋のうるひくのちねきをせ
祈伝へなの敵をわごきうへまくへ

望夫石　ちぎりにたとくらう　ぐうふせきもの貞女
ありを夫

男女おさびひは
ちのひて誓るなり

未の松山浪おけ　佐賀にあり男女のうるに
役を従ひくきく　武蔵小の山上に送り立をして化して石となる又出羽に
金夫橋　金夫を
る所おもしかあり
あるるなり

頌巾麿山　祀芳拾遺那まあり左ぶまひこ考ろ
書徒朋　婦ぶ古るなり

頌巾麿山

芭蕉　堅水　岐阜　禁空　日蓮　雨　去来　俊仙　也之　お杜　嵐深　且葉

枯野をやまふうとし　枯れ花
山ひとてふのまきれぬ
一重の山ひ　山ひ枯
とまつきも山ひ枯
ふるとも　ふくとも
去来の茶の
ひまき　ひとひ
茶の
芭蕉の
芭蕉に
芭蕉
芭蕉
芭蕉

山ぶきの花の色紙にかさねたる歌仙の
絵やなどのくさ〳〵にちらしたる葉の色
筋もさに蘇の生けるけぬ格子のもの
永きひや鶯梅花ほとゝぎす花ぬすゝ
あのきりぎりす泡しの木花よりもるる
月雪の流れ　のこりを残しろ

荷芋　黄雲　香泡　卜枝　雪水　月

初夏

おろしものゝやうなきぬ物にものつゝ
み袋襟もかゝるやうにたゝくさに
こゝろもかへりもさゝ〳〵見たきか

涵通　傘下　持　蒔絵　深

肖松老人のもちたるゆ〳〵しきかな
ゆゑ香をるのゝ茶碗けよ文鎌のくれなる
とそ雲の教成人のおきたるを茶色のく
ゆるる茶葉の枕文鎌にトつのゆ〳〵しる
緑ゆ光者もゆるゆ〳〵おきものへ

荷芋

山ぶきの
夏木ゝもたゝ一ツ葉のゆ〳〵しるの
ゆるゝ茶つゝとゝあるらんかきつゝ
林の木枯ゆうゝ見るさる茶葉のゆ
かうゝの茶葉をみせいけくらゆ
茶葉ゆゝ〳〵生くになるのゆ枯みゝ木ゆ
見けるなくゝなの生ゆのゝこの葉ゆ
ゆらゆゝ枯くゝ茶葉にゝまるゆ枯葉ゆ
あのゆゝゝて茶を見にゆくゝタゆゝ
まけ山やゝトゆゝあゝ枯ゆ木
上の山にゆつの種ゝゝまゝ一稜
枯色いまゝのゝみるかつゝ枯ゆ
麦の星ゝ茶枯木ゝのゝ俤里ゝゝ
おきこのゝゝに志ゝゝ里の茶ゝのゆ
志ゝ苔ゝにゝゝの弱や葉の嵐ゆゝ

芭蕉　一井　栽人　改草木交　月　蘇　苔泡　竹泡　鉢可　茶ゝ　玄葉　生林　他者　鉢可　蘭

宮の滅

物香　大流　源氏香　香机　香盆　掛香　匂ひ袋　留香菊

衣　る宮の滅　うつり香れ

一ツきくうせぎゆ〳〵去んをゝ
ゆゝうす時いたちまち消るゝ〳〵物忘に見え
ゝゝゆる茶い堰挺なゝ石枕ゝと名づくる宮の名
物忘茶宮程扉皆法あゝ大抵ゝあゝゆ
ゆゝゝゝい別ゝ御あゝん今ゝに伝ゝ

男色　弱冠　男色　常陸帯　表の歌　裏の歌

美の歌　流元

花広の弱　多の歌　雑侯森　多の歌　岳男

於多の風流士　今の人雅のゝゝを男とゝる
去いあやまりなりそゝゝ

於地は嫁ゝ

名籠ゝ
ゝるゆゝ弱茶
たゞひゝ異なり　於地は嫁ゝ　上ゝ　返魂香

返魂香の中世人の知る所なゝ異ゝ又唐の玄宗
種ゝ玄甕ゝ枕ゝ楊貴妃が美魂ゝ見るゝあゝ見澤
武のゝゝ世人の知る所なゝ異ゝ又唐の玄宗

返魂香

香　薫物　蘭奢待　笑顔香　十種香　競ゝ香　三夕香　出川　小香ゝ　伊居ゝ　百和ゝ　宋梅檀　ゝ　宋香及

返魂香

工ゝゝ形ゝ茶せゝゝ茶ゝ茶ゝして百ゝこれゝ茶ゝ法ゝ
人ゝゝ画工に絵ゝ多き君十万ゝあき君又ゝ万に
喊ゝゝ狂ゝ情背せゝ遂ゝ見ゝゝゝゝ泡ゝ匂奴ゝに
入ゝ美人ゝ求め湖氏ゝせんゝゝゝゝに枕ゝ上茶
ゝ茶ゝして昭君ゝ訪ゝ彩ゝゝ去に及ゝ石ゝゝ
かゝちゝゝる後宮ゝ一ゝゝ帝ゝゝゝくゝむゝゝて
ゝ伝ゝ弁ゝゝ美ゝ友にゝゝ人ゝ及ゝゝゝ
ゝ工ゝ市にゝゝ清ゝ琴操ゝの流ゝゝゝ
李夫人ゝ李ゝ西軍が武帝の夫人なり

返魂香

物忘の
風流士

多乗さ河ふめきけ〜は一重ぶけ〜ぶ〜直に実を見る夕のめ
大粒お雨にあさへ〜芽るのを
蕃なるに見を拾ひぬけ〜は花

保川の蛍　芭蕉

蛍は夜もみ〜〜くあるぬ〜〜て
さら〜〜氏の香いおれ見はかつたる　岐阜　李梅

仲夏

蛍は夜に光るほどるの
刈茅は夜に光るほどるの
蛍の糞きよりるきくよふるぶ
蛍ちく遠まる海のほるぶ
雨の夜ハかをのり蛍のめ
くさの蛍は雨より出るるぶ

蛍柱　朱巡
吉次
蛍蘭
蛍水
横井　元禄
不交
風留
青江
倉岳
卜枝

女房

女房里房元武人の妻なり今夫
その妻と味んく女房とふ

妾

女　美妓　美姫　美妹　姉　妹　美女
美妹女　地女　魂女　幾女

外婦

乳母の里　古市　宮の洲　祇園
遊里　大夜　渋妾　若衆の里　浦衆の里

妓楼

遊女　妓女　娼女
遊女　雛女　若女　河原の里　出女
妓婦　遊君　河原妓

女乐　白拍子

乳髪　妓の初雅なるもの

髪　髪　髪　髪　髪

髪楼

女乐

遊女　倡伎女　妓女　娼女
浮瓶北　出女
妓婦　遊君

女乐　白拍子
乳髪　妓の初雅なるもの

小三枝　上ま　秃　白眉祇　妓院ま　鬱　鬱老
私窠子　張一麦女なり　幇間　牽張又かなづ　傾城　傾城傾国　元禄人の
林なり　張く　傾城女　傾城　傾国
遊女といふ　張間　男色をひさぐ　飛子　旅陸る　令剛　雄房　色ま

伽やらふ　伽やらふ　伽やらふ　亡八　淫蕩　まして
元禄　礼智　孝　悌　忠　信　義　暁傘　元禄のころ江戸吉原の
郭中　後朝の雨　暁傘　傘
伝の　ハッとうしの　出　暁傘　傘
きりこ　暁傘　傘　傘
あのつき　かき　を　見せる　なり　神媒　女　媒　正　姓

暁傘

遊女

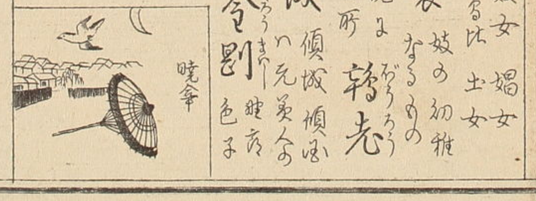
遊女　倡伎女　妓女　娼女
雛女　若女　河原の里　出女
妓婦　遊君　河原妓

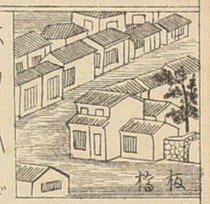
女乐　白拍子
乳髪　妓の初雅なるもの

小三枝　上ま　秃　白眉祇　妓院ま　鬱　鬱老
私窠子　張一麦女なり　幇間　牽張又かなづ　傾城　傾城傾国　元禄人の
林なり　張く　傾城女　傾城　傾国
遊女　張間　男色をひさぐ　飛子　旅陸る　令剛　雄房　色ま

伽やらふ　伽やらふ　伽やらふ　亡八　淫蕩　まして
元禄　礼智　孝　悌　忠　信　義　暁傘　元禄のころ江戸吉原の
郭中　後朝の雨　暁傘　傘
伝の　ハッとうしの　出　暁傘　傘
きりこ　暁傘　傘　傘
あのつき　かき　を　見せる　なり　神媒　女　媒　正　姓

暁傘





立春 雨の音に春おきまを雨習ひ　春泊
法華寺
おもろうさらしさらくる梅園の雨　真玄
おなじ所
おもしろうそのそかなしき梅雨　芭蕉
れをしく
梅はつちに梅ちほまて鶯寺　荷弓
月
新河くに船も鳴くん梅岡舟　越人
先ふねは新も鳴くん梅ふねは　大津　濃児
曲江は梅の花えぬうふねうの　梅付　路通
梅の栄は花元うゆるかうれう
松笠は源を花くるをつ蝶の　卜枝
江の花をうくを里中の梅は　龍可
蘭の花や泥はよくうく春の雨　月

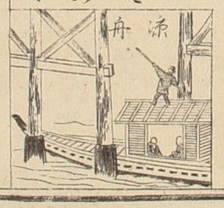
探るや荷待者人もうらむくん　越人
次しや町のこる夏の河さ　蘿蔔
夏の花や花きさに蓮みゆる雲　且来
蓮の留まに
先ひつやはこきに花つは蓮俳　雲角
夕のれや秋の明くのしきこれ　芭蕉
あのそのほの花ちもい人のちくぬし　雲水
夕のれい故の明くのくらきうの　倍空
山路来て夕のれみさる花あの沈　はま市　柳
名い屋ちまの夕の花に俳河屋し　去江
暮夏
梅と花くやくし せみ乃 越　周碧
そこの学源のけ所さくる　雲水
夕立に干傘ある 恒穀 の　傘下
せくしきに夜もやく跡 本法の　法橋

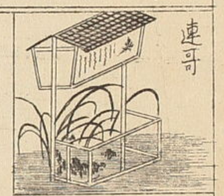
姓戒婚同長曰二弟媒

切字

或人をせをは切字を問ふを
せを云いろはは四十七字これ切字なりとて云
事さかりむきあり後世は切字いてはをは
り者のぐいろは四十七字切字あいさるいな
もろおしまい音韻平也を仮字虚字ともに虚字元のこに限
らねどあまをは季まつめくはなりてにをは又これまお
などてにをはの四字いちくをさらく又字なる
友に早七字をつめてにをはといひ又略してい
てはは字なり初学の人やの字らん多り
ありとさ人はいかなくば切るとかりふいたぐ里俗云へば

やとはひてそといひ字といひりとはかもて
にをは同いされば切まぬ古人の發句まも多
たまてはは字いぬあり
梅はくらさ桜 女の花 この 乃 せを我
おの人義紅なまてい多 源 この乃 雲角
梅さくらさそこはひて字とい留らまを丹なまばこそといひく
源みかれとい切まぬなり梅さくらさて女の乃
答京小とをまび留るなり は人数紅なればこそ
源ま梅をとをまびあそ切るし は他若ろをりの
を弁へぬまいあくきるべし 筆若のまま はあや





連哥

まりたるを校合の初とくゝぬまこゝろ あらめ初ふの人い古人の名まわをまきてこまきさへとまるふべをまびそのけぢめをこゝとるのこゝ遠雲は首きき待きぶ家どつをもこゝ和てにはのとのちぬ

友のおやまりへ是をかくの如しとゝへどもをゝめく俳諧は遊ふ人てはそはのをなりひきまへ是してまるふとも

あるべをまびちのくつのふべき 切字を少し出を

引出てれや 近江路や 信濃路や 奈良の やまとは教いきれぬなり 治

宮の や 上の句をおさへくゝ あらとゝ治定まるべし うゝがひのや ねぶひのや まや奈良

待きぶ

去来 荷兮 月 嵐雪 如風 津多 俊仙 月 卜枝 赤柴 岐阜 秀正 松枝 鶴風 古梵 笑水 長虹 俊仙 又園

涼しきよ白雨なのゝ入日のけ
笠しゝ涼しや君のまゝ
きき庭の砂河つゝぬくゝ
おもひまの人に逢ゝ
乗石の石苔や苔の下きみ
涼しきやゝ橋の下田くゝ
桃花のまやらゆ きくみゝ
きくしきをゝ苔きゝ川逢
ゝちくゝ行うゝ苔のゝ
苔見むゝにさのやきゝるくゝ
笑を巻くみゝ蓮は暑にゝ
河骨ゝ花苔ゝ苔の色のゝ
きらゝと清ゝに松の古巣
きみきゝゝ沙千の沖に清ゝ
蓮河ゝ結せゝ橋に清ゝの

近江路

一城 いひ城 ちゝ城 ちゝ城 城 城

秋の木の葉酒木のまに佐志くら竹
葉は白きに春こそ見ぬなり
よもやまるの秋に咲く洞の白なりて
秋影をなのるにやまるくらやまの
深みる秋の木の葉にうつしけり
河さの木の葉やむくみの水に秋る間
葉より紫にもの咲やもも春の春
秋風や志きもの月に秋さらん
原しさい世雲より鉢鶏の鳴
蛙さ茶物きこるぬかい
まろむしの通る路より留なり
きりぎりす焼雲きえて春にろう
河の春い稲妻を待なりうの
必なつまやきのい来ろふ西
平角
水泉

文鱗
荷号
荷号
路出
奶及
蔵深
去来
昌長
響汀
一鼓
茶秋
芭蕉
平角
水泉

ろ たがこゝをぞあどうさぶ
そろあり加家なり

ら 四 ようにうよふ四い加也
也ゆ四おるわ四あぐ
四るにうよふ
なかまるこ

れ 四 うくまらぬふむるうのりじを
上ヨわうぐれどれ四と留らば
これも下和加なり又和を
ほかけくるところもあり

よ 小て すそいうあるうふ
なり面ヨ汀とも

そ そを汀を茶を茶ごゆるべー
けるあるなるとい せねなり

ま ん いふ
まづいうさぶひくるてはは
あり句中まや汀あるべー

め り 茶りとうよぶ又ねうふ
てろろもあるべー

か し そもそもねのふこころあり又いひ
まそいそくるところろ汀り

一句自他 これは初句の
人まくあるとあり人くへ行風さもむき長茱つむ人
を行風さもむきの自こまろあつむ人の他なり風あるす
らへをあるべー

題 すまくの物不ふまるに蛍ー

ひよろくとも秋の夕ーや女郎花
物つくるまもらさひしき菊菊ぶ
茶まりくかくぬも荷ふ茶雪ぶ
めえきれて寄留を なくる蕎ぶ
物人や 極に ままーんもくる蕎

芭蕉 他者ふ如 伏見 任口 荷号 奶及

字後法師のを茶にちりて
名もさくぬ小州茶さく雪菊ぶ
くしくの今る 松に今きき蕎ぶ

来雪 俊仙

仲秋

蟹茶まの鳥のまもりり秋の蕎
つくしく絡をえる秋の面うの

芭蕉 かぎ ふ 蕎 はる 蕎号

茶川や茶袋をく秋のくれ
石かの蕎もりり 秋はくれ
前のねや 猫猫いつる秋のくも
原の蕎に人の鳥みるやべうの

幸下 枝 一鼓

あろとたねとくくまぐに茶よみ出さまぐ駄俳
てふとい茶ー中ころよう駄俳とたんたぐまり
る凡猫茶遊俳しまにその実情不角色ま
秀遊多ー駄と沼く俳ぐる時い云とりぎりかのを
ぐ方ろめもいうさるとさ人ぶひ出せるありされど駄俳は秀
遊なーとふまいいうぐまぐ駄のありむきを解すべきなり
たとへば花の駄あぐぶ近くい巻茶に咲そあーよ
り花林のかるりげまもこころをうつーさて駄日
夕日秀風茶どのあるべき形くの風姿をかりひ
めくらくーまべく実情より葉ー出まべー 初花

四と畑をひらくよりはあの葉山まで
山彼方の麻畑つくりたて笑ひかな
あの葉のかたのをしへる風の桐
ちらぬ人とものぞひてみるわ葉ぞ
葉の中にお葉みちのきと立枝ぞ
とあらあく地よりみるの衣なり
見の右いしとやら秋の葉葉の色

蕎秋

なにとあく植しの菊の白きぞ
ちらぬ菊のちらぬをのしはもしき
山法の菊雪菊と又ちのひろ
一色やひらぬ菊の色ちのう

初冬

今年の野辺ちのうれる赤色ぞ
うらぶしやるとのう葉きる時の

伊よ一泉
宣五
宣南
東順
林芬
越水
宗和
小枝
昌碩
越人
晩艇
蔭花
年下

一幾つ柿の葉みの色になりまるを
枇杷の色人のうまるを木陰のの
梨の色ちくもに白ぬまで野株し
葉の色枯ぬるのふみるやこのくり色
枯ぬるしやまるまくぬのちろと
石面の破て生のしやはまの色
ひるくらしもの絵ふうる葱の
葉他のかくらの見やる林葉の色
ちのぐしにひとらの色ちり蕎の中

仲冬

あろしぬく蕎ちつるなる蕎のの
ちくぬとつ色てたくしる河の色ぞ
接ぬるる蕎るまるあくの色ぞ
紫の色をほくるにやむ蕎の色
ひくける葉を枯ろせん河くの色ぞ

伊勢
猪吉
日
重治
林芬
吉兩
宗之

初時雨　初丁　初雪　初ぐ　初の字附

歌い初の字の後をくしかあをば初心の人よ
くかりふべきものなり　一字歌　梅櫻　自花雪など
一名あ字い歌べく一字歌といふべきなり　結
三字　四字　五字の歌とおなじ　初春の霞雪中のみるなどの歌なり　雜頌
のうそ　初の字の歌とおなじ　外物の種そ
も一句より出べく　結句歌　結句をえ出べく歌べき　種文歌　法花種の
歌とべきるあるべく　一篇のあるを詠たるもあり　外物の種そ
組歌　或いは首十首又い千首歌を組
あをせべく詠まるを組歌といふ　傍歌　歌の

外はものと詠まるを傍歌とそ物ふなり　落歌　なとべ山路の花とよみ歌
山のこころあきぶ蔭歌なり　蔓歌　あ合あをの附蔓て歌を宮め歌なり　探歌　序上そ
後は詠まるをいふ　古事古所取　歌より古をのみ生るい昔
うらぶ古るの古あより　又大切なり　初句の語なり　俗階又てもと
波ぶべし　歌い出べく　古人の俗例あるやまらの歌を出べ
あをぶちに孫らしらせん　とそこそやう歌を出べ　時い初心の人
めいつくしてうくりて　秀逸なるものなり○歌老井評六
の後は殺句を素まるまに曲節をもみれて素ぶべし　歌の
曲節をもみれきれいおのづから　多くしてまぶらなし
と以ひとおぶうけづきぬ　詠べ　歌の曲節をも
なれて素じなば傍歌とあるなり　おもい古人
の歌をひて後は歌をあをまをひ　遠ひらべし

附合

雲のおせんさんの雲のあをれるう
ゑ柳の葉は葉に見える水の面
浪き他水のうへに流れけり
つきつりうそ　まつ葉のきりう　蓮水
かもまをく　何をやく　こき　池花ゆ

杜國
揚吉
後仙
除風
花舟

葉書

俳つきや　肉よもちらせ　ゆくらあ
を書　をあ　ものの河り　を書
ものち　花の後　いきけ　ちちぬへ
春色　く　帽つく　かつる　茶烟ゆ
煙　ちらし　極に　さけ　くる　氣ゆ

芭蕉

雪下
尚白
雪水
雄仙
一鈴

芭蕉俳序

此集を拾ひ集める孤屋雪坡利牛らいつねに芭蕉の句をひらきん

乃泉をくみ　ちりをけ　河ものなくのみ　家ゆ
枯野　見をきけ　みの河へる　雲なり　雲作
を　く　おく　河色　ま　を　花　ものこと　雲に
ゆく　を　猶　ゆけ　く　雲　おこ　庵　主て
主に　ひを　ほゆく　け　乗人の　を　花　ま　く　を　く
ひつる　茶　花　なく　く　ん　ゆく　ち　花　く　折　著　ゆ　煙　の
ゆく　や　の　なく　る　を　雲に　おき　樓　ゆ　な　く　し　つ
を　屋の　松　花　古　さよ　を　筑　く　古　ゆ　り　ま　る　ひ
ひつる　夢　花　み　く　う　の　耳　ゆ　入　さ　く　く　そ　う　つる
う　花　め　雪　花　め　ゆ　花　花　に　視　の　ち　ち　る　る
け　ゆ　や　あ　れ　を　ゆ　る　ひ　立　は　る　花　は　の　歩　門　と
ゆ　し　ゆ　り　花　の　月　ゆ　は　ら　る　あ　け　つ　や　く
ひ　を　り　筆　な　り　く　を　は　の　ら　ち　花　こ　ま　る　に
つ　を　の　く　な　ん　を　を　ひ　ら　き　み　る　に　あ　る　夢　花
ゆ　を　ま　ゆ　や　と　り　を　き　ま　ま　い　又　く　ぬ　き　雲　乃

天人地

發句いろ〳〵あり〳〵たけ高く能くべし　俳
いその時花とのぶきび發句の余情を御べ〳〵
ゆこい潤句の場なり花又たけあるやうに能る
べ〳〵　古人とにらんもなし〳〵爲のみゆこまゆる
さび花その句を優美なきんが爲あり　この三句いなとべ天
地人のこゝ戈ゝ發句天先生〳〵　俳句の地次は生じて陰陽あ
俊成ゝ志の〳〵〳〵後ゆこの人をのるに生花人い
花天地陰陽の氣を沒〳〵生花と必べもその姿又
地に美なり友に ゆこまて潤花る四句めより八
句めに到りて本會獸爲物なる裏うつりより

草木禽獸

夫婦

人情如こり　素怒哀乐生死の裏より名誉の
表に到りて生死流情若愚賢愚治乱老幽の
差別なり名誉の裏より情若の本心は爲
して天下をまのうちと示す一巻のそこびろく
の如〳〵　家兄弟名云附合い夫婦の如く表べ〳〵兄弟のこゝ
表べのこゝ夫婦の祝〳〵き是より切あるいなしと必べも元他
人人　墻は閲ども元同胞なりこのころそて
附合をもれば爲句のうちきとのゝる〳〵とこの
云あぢいひあるに仕り附合は五作あり　又作
とい情如極所を巻り句なり支考七名八作と

兄弟墻閲

筋みえさうけさ〜えを敷手をかく付給
るに清拙正義に次る立りの志めこゆるに
やまくの葉〜のたくひまの河くねと例の
口にまのせたるよも河を口をそりにより
変河りつるさりなく〜ひと日芭蕉菊橘
りの青途よりやつのれこのねをたつさへて来舎
お郷を繋うう門栗の葉のるりお如んてこの
ふ能の根きう七桶のもりるよりうぬき
岸の雲を家をもちぼ〜つるう門まる岸
うちら〜ぶへるに能七りうこちら
たるをわる少をくくよりおるひうるに
やいちふをえらふ蝶と成みくうこのふ
もく直〜う序書さよとを拙そまれ
ぬ今時りをうう如兵物をおりふ る影号
れのつのくひりさふに布をつる横る

其角像

製毛年竟附句い自他選ひよる生角云附合
いさ〜合くまとぶまれんより上手とぶまること
よけもこの説更にとそりうりとるあぶ元ぶ俳諧
のさ〜合い諧に平庚あるの如〜諧の平庚戌
とのふるい雖くまひらぶのさ〜合と繰るいやま〜附合
合をくらぶ〜ぶまんより附合をせく止むまいあぶ
ぶまおてみりの出来〜より赤い河くぬまぶるる
なりゆきぬとあるやんとあき江雪の作らま〜
ととりありうく おぶゆ俳諧も点取とふことのさの
りまなりしふよりひざこと多くなりぬ 也おろい

点取

出雲八重坂

はあ〜〜〜

徳有尼の指痛を押へける
ちん　ひやく　きのう　ゆるる　自
ちつ　ひに　茶　無　下　地　茶　みる
寿　を　おま　に　あ　合　ひ　ぬき
町　尼　の　ぬ　ら　ら　と　妹　と　茶　社　法
門　と　押　る　と　壬　生　乃　を　拂
茶　尼　か　せ　に　業　の　ぬ　れ　を　以　四
た　と　あ　る　ま　に　流　る　ら　ら　ぬ
江　戸　の　尤　太　も　の　ひ　ま　を　鬼　ら　色　て
あ　ち　る　と　必　色　ば　こ　く　面　を　の　長
方　と　に　の　板　社　内　の　加　ね　乃　ま
相　社　未　こ　る　く　月　さ　ゆ　る　な　り
門　志　め　く　な　ま　ろ　と　ね　う　面　ね　き
ひ　ろ　ふ　さ　重　と　者　こ　の　と　ま　る
ま　ら　牛　れ　女　尼　の　お　や　と　拒　業　と

壁波　芭蕉　壁波　芭蕉　壁波　芭蕉　壁波　芭蕉　壁波　芭蕉　壁波　芭蕉

又　法　社　ま　ま　ま　面　妙　軍　人
流　市　の　面　流　と　流　る　な　さ　う
飛　ま　を　下　里　と　麦　麦　社　出　未
と　社　寿　も　志　社　月　に　宮　を　ひ　け
面　に　流　る　く　ま　ま　社　雅　吹
ま　寿　乃　一　板　く　ま　ま　う　あ　る
志　進　の　言　社　た　て　由　集　用
様　へ　も　知　ら　せ　ま　嫁　を　ア　ま　林　て
扉　尼　の　法　ま　み　ア　る　菜　ま　寿

百歳

壁波　芭蕉　壁波　芭蕉　壁波　芭蕉

利牛

ま　い　流　又　い　て　こ　ま　ま　軍　苗　ま
岸　社　以　を　ま　社　面　に　さ　く　も
面　流　う　ア　珠　業　を　流　の　ア　ま　し　く
ま　力　町　と　り　む　う　の　ま　る　の　せ
牛　牛　に　茶　尼　の　伯　た　く　り　よ　せ

壁波　芭蕉　壁波　芭蕉　利牛　壁波

宿構句

今の俳諧は専ら人ねく名短の句を作りかきその席に陳ぶ句の志のるべきほどに別その句を附るとなり とぞ称の句いろるも功まくさみやうなる

犯句

自分の意若はまの世席上老俳のことぞを用ひぞ一巻を犯しくほ〜以まに句をもえるこ

木に竹をつぐ

玉篠集

負猶龍悲古人の遊命かるに於ては一巻の冷味細密なるを句名と或人云おろ〜い句楽〜て附句を出せり今い附句をおひ出〜くまえるなり初人の時よりかやりのるのでつきまんく落まさ

曲六生涯上手まいおらぬなり 魏志よい人生繁著扉文巻六

笠 夜成長所設定時人常取為宿様くまびのろとしまえ

宿様句と云ことといあり云ると見くるう

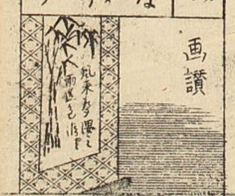
家出る漢八解なり衣あり美徳を発揚せるな

画讃

りと訪りを多くびをのるの七漢美出るかり或い

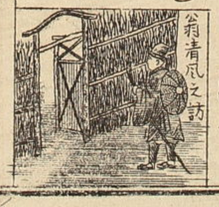
長を為とくく長名は名づけく画は声と落るなり

画讃



狐屋
利牛
雲坡
狐屋
利牛
雲坡
狐屋
利牛
雲坡
狐屋
利牛
雲坡
狐屋
利牛
雲坡
狐屋
利牛
雲坡
狐屋
利牛
雲坡
狐屋
利牛
雲坡

の志ある人の人をたのみて歳ぐれいたりし老婆ひとり
桜ぞうに奥の細道は三日風雨あまたたびよりし
なきき山中は温泉ありしかるに云云
出羽の国に大山を越えて酒田の湊に出でんとす
たまき洋を流して富士の麓は雲霧に云云
ひかりのもれ月の光をかがやかせ
そと和りくまなきまで日ごろとめる長途の
さ雨によりて なく 行く云云今の里四日市



狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋
利牛
雲岐
狐屋

清風が見識まことにかるるとも行きかるべし

○いろは歌を本歌

いとゆかんとをあきー　いとゆかんとをあきー　いとゆかんとをあきー　いとおりろたー
いとけあきー　いとけあきー　いとつさ
いまのこて後一　池の面之
いさらー川一　流出木を云
いさ一　ねるをいふ森
不和一　面低
いろ　山吹
池の水
いさ
いさ
いさ

又はなみ〜を美陽たりきく
如き清水の中の巴形をまろうし
入水る人に赤味を生じ
其ちこの水に水腫浴の就四り
病薬屋の花ゆる者ありつき
ちゆり〜とぶんとおこらをきちれ
る蓼に輸まる熱汁
苦味こちり引越て来る性をら
瓜糖にまる医る少よく
おちかるうり〜性あ而乃まる
入み てく自の六月
拔き〜おの蓼花の蓼まる
尚こつ花る間こうか瓜
大の水性ゆに相の例みけく
仏未菩虎ちを抜布の丈

雪波　利牛　狐屋　雪波　利牛　狐屋　雪波　利牛　狐屋　雪波　利牛　狐屋

いさ　さそふ　ろうせらるる　一あざる　西去　たかる　七句去　蒔りわ　去る　一まつのなり　赤　たつの赤なり　去ゆ
ろこ　一ちろしき　ちまなり　きらから　一きゆうぐわ　兄に　赤に　西去　た
やしれ　一林檎　六月なり　椿の実　ちまゆみ　一紙と　実こるを
ちきこあげて　一去たくり　あけこる　くのあくさし
匂ひ　二句去　蒔りわ　三句去　水蒔りわ　三句去　下れ
みて　去　なりこ　湯りろ水　こびは　二句去でトをおなり　水
けな　一まやわざる　水れまち　一おるこるる　二所とふ

花かつみ

雪波　利牛　狐屋　雪波　利牛　狐屋　雪波　利牛　狐屋　雪波　利牛　狐屋

蓼重に可日ふの酒ちを徒
九九十日屋をまれらを
投ちもをまにめつとか
里なく来盗よく偽に水る
里ちかを此礼引のこ
やくらるのおを嫁の種ちの
毒ま如る穀りちまの精進苦
うん〜果くる八者のをら
ゆねはま仙蛍信のはり
汁汁の宿を出をまる俗
夕自ま醫若の名家を安をく
色てちかる蛙のやまるを
命蓼光を今医の屋ま歌ちて
ちをや仕ちを来ちぬおをちへ
寒病お体ま出国をうるさのう

雪波　利牛　狐屋　雪波　利牛　狐屋　雪波　利牛　狐屋

附まあ　とまれがくまれ　ちりゑち　ちの清さり
人を　ふ　ともあ　ふ　ちりて　尾と　ちの　ちりてんれ
づま　一務　去のめを　ともあ　ちりゑち　一尾と　ちの清さり　一ちりてんれ
生るるる　去ものかる　去ものかる　去ものか

なり　臭こ　伏こ　面去
ゑまん去る
仰なり

なごみら一　焚中みとり　なるなり

つらつゝ一　ねるの　るなり

つとせれ第一　芝居を　よくし

るらん二句去　蛍いか　ゑ二句去

かきん奴二句去　ふの奴付句と　畑

な　乗不　畑　かよまに　け一　おとなり　きとよ

かひらく一　長花の　ゑ

かりて　ふせ一　うろ　ぞく

かのそこし一　あふの　るなり　かじろ一　おそろ　しきと

どのげざて

かゝまと　ゑ　かひらろ一　ゑやう　なること

かわと

利平　梨花　孤屋　梨花　桃華

芭蕉　冒る　杉風　去来　巴秀　梅笑　盛水　伯圓　孤屋

初日影我華立とつまる　北枝
若松の親はなさ来る　北枝

梅

梅一本つ色〳〵　芭蕉　姿こゝの
うめさく中の桃花のきさまのう
梅の表は節に立よる初日影
宗波　こちせ見おとゝ
梅ゝゝゝ中の光の日は匂ひ
うめさかそ向屋の窓色直しゝ
赤みたくのはをめゝう　梅は　芭
みゝ〳〵に咲梅の有てうゝあれ
お梅の姫　北枝　書屋うめ
芭蕉

利平　梨花　伊賀　出芳　利平　孤屋　梨花　芭蕉　雲角

猿のうきさまるおし
柿にあらば
こきのこなり

かりとなり一　藤橋なり

頃去　かさう伊ら一　羽蕉鶴　とゝ

かるゝかく一　藻は　あくび

よみだ一　やゝどの　ゑなり

よきうう　なるとゝ

俊西去　よおろ一　たくの　るゝ

仕丁　ゝ去

ゝ二句去　ゝトゝ二句　我ゝ飛げ不蛙　かゝ〳〵

祇　しきと

かゝ〳〵れ時一　祇二句去　かゝまえ一　頃より　祇とゝ

のかゝ一　天るのき　森るし

たどる一　たどり〳〵　ゝ去　るまゝ　かり

よおゝゝゝふせる山一　きよのゝ　よん

ゝ去　蛍りゝ　ゝ　蓑を　ゝて

もんめん　云ト同　つらなる　二句

三句　連俳ト云なり

そよ　云てにを　二句去

ぞ　二句去

そのうみ　むかのごとくなり

そよ　云同　二十四十六十　ふぶひよ　打去

そのわつまし　雑蓉の時　氷柱分

そう　つ　流水ト云かゝ穂ゝ

つらゝ　七句去

留りい　打

つらん　二句

法ときさせ　きりゝ　氷

なり

法　つくられ囲　つゝとよ

つくもがゝ　髮

打去

法　二句去

法　二句去

留まい　こ

つ　巻りうゝ　ぞろに　うゝふこ

法　留りトの句ニ上の

句法　留口俗

ねろゝ　招わさゝ　風俗なり

ねちけ人　法人の

なり

ならん　七句去

留りい　打

なきなる　ホ　二句去

なよひろ　ホ　二句去

ようなき俗

ゆめ

げ　乳なる

なつ　なきなる

なつ　ホ　成の字ゝ

なぐなホ　ホ　なぐなホ

なぐなホ　ホ　なぐなホ

なぐなホ　ホ　なぐなホ

なつ　ホ　なぐなホ

なつ　ホ　なぐなホ

なつ

なの色てもをれくゝ咲くる花ゝ
柿は紫葉四月ゝ真中花の中
牡丹は大くゝ人の中花ゝ
ゆとなりゝ花に五戒の橋の
花に花も毛虫ゝ花ゝ
山さくらちるや小川は白波
光俊ゝ花ゝ
淀母を花に継ぎゝる匠ゝ
山さくら小川流れ水ゝ
昆布さくらや花に金のつく屋敷
おちつきに雨やまの井や橋のり
折かへる橋ゝ
桑は所
金のゝきは白ゝ
敷しらば

斜岸
小枝
鶯
角
雲
大津尼 智月
大坂 之道
越前ノ守 蕉雨
利牛
白
鉢屋
墨坡

のろく

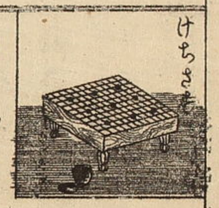
もくつけき 怪なき ム なり　もゝひ 鼠とも　むや
の関 奥名まあり 関ノ通と云　うらと云 同 うら林 うら柳 おし
滝 瀑 ゆ　うち 同 二句去 うち水おと　うあ花 男女十二三 ゆとなり
うあ松 小松と ゆ　うゝかと 泥とゆもん 枕とゆ　うつゝ仏 うつる 仏
うけ花 のろふ なり　呪詛 同 調伏 ゆ 去　うれゝ花 うるゝ花 なり
三句 去
鮫 ゆ 去　うつゝ 同 ふゝゝて 二なり　のゝ 出て花ゝ　蒔 同
のろし ゆ 去　戰場の鬨 張鬨ト云　くま ト云 同 二句去　蒔 同
くもの巣 ゆ 去　くもの巣 ゆ 去　ゆ 去　くま 生る 人来る時 御幸とゆ　くま 生る

蜘蛛

芭蕉 多 冊 炬 清 猿 雅 仙 華
法 友 物 社 酒 より 用い 莖 こゝ
此 葉 ゆ ま な る 法 孤 屋 旅 三
る ゆ ゆ る に 品 川 遠 兄 御 ゝ て
や 雲 と ま ゝ ゝ ゆ も ゆ ゝ る ゆ
橋 さゝら 雲 自 ゝ ゝ ゆ 別 遠 ゆ
首夏
蕉雨社 東 ほゝ ゝ 日 なり 赤 かへ
名 かへ 十日 ゝ ゝ 蕉 ゝ ゝ

くれ 暮れ
香

やまあいの袖 山は生る 袖と 雪 ゝ　やまくち 寄 ゝ　赤 の ゝ
ゝ 二句去　間 ゝ 去　まぶた 目 なり　早 二句去　まゆ
ゝ ゝ ゝ



けちさ　七句去　苗りハ　けり　二句去　苗りハ　面去

けるけるかな　けちさ　去の心なり　けぢ

けいめい　去の勝たなり　見助勝たと云　こゝろなり

雨や　去　二句　下知の雨　二句去　花さけ

けれなく　仏なき　なり　去　二句　花さけ

雨や　去　弦の音　なり　弦わ　去　ふ〜こゝろも

喪服なり　ふ〜みゞ　依信る水と　もくろなり　ふゝ花さと

喪衣と云　仙境なり不　植郷と云　ふりさけ見る　つ〜ぶし　体　張抜と云　意〜

春〜ホ　祝主の〜　二句去　こゝ　二句去　苗りハ　面去　元ホ

あゝト哭　詞　あ〜意〜　あ〜意〜　あ〜意〜　あ〜意〜　あ〜意〜　あ〜意〜　あ〜意〜　あ〜意〜

あをにより　一　紫宮といへん　悦云なり　あみうま　あらがーま　とゝ詞なり　あら

の水　一　雑音なり　雑　仰と云　さらん　七句去　苗りハ　去　さ

ゝ　二句去　意〜き　春〜き　春〜さま　さハト　哭　詞

二句去　苗りハ　去　さへ　二句去　されト　云　詞　芙　秋　されト

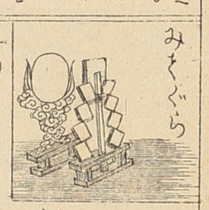
九花　丸花　芭蕉　去木　芭蕉　去木　許六　支考　芭蕉　素堂　芭蕉　去木　許六　支考　芭蕉　去木　芭蕉　去木　芭蕉　去木

二三番 鶴の声しるしのあつさ 書町 紫雄 芭蕉
きせ山は力れよりあつさ 後河政や茶屋の白し
はの白い時四ようの 使に
五月雨
さみだれやしら雲ながれ魚つる九十郎 素龍
五月雨の色や淀川大和川 桃隣
さゝたれまわ朝をたきるゆ使ふ 四時 芭蕉
五月雨や家の茶にもる 蘭
五月雨の白い桃源 ようこそあしの風 五月雨や彩も枕ももゆる本 徳五
涼
川中の根まよろこぶ苗みゆ 芭蕉
五月雨うたくるまや業の光り 女の弟
涼しきまま家てあるこのる赤の数 弟七

ホ出ちに ざうざうら ざんざん なり ぬれぎぬ 去 ぬれぎぬ
さうりぐさ 蓮面 去 一切流生と云 去
らへ 海人の 去 き 二句 去 きびそ
一意の別と七句 去別と二句去 ゆふさん 夕日の加 去 ゆふの
ゆふぐれ みゝ 幣の中 去 夕きこえ 弟 夕きこえ 弟
たゆたう 浦よりなる 去 ゆふぐれ みゝ
おうこふ 来人なり ゆきとゆ 桐 琴の糸 押る めとゆ てはは
二句 去 苗りいわ 二句 去 苗りいわ めるめやわ
二句 去 めくく云 桐 面めきと 去 めくく めさく 海士の お 弟

り 焼を たひてくらる 去 みそ
時の 風 に 去 れそ 涼し 五位の 移
去 きもを 去 柄杓の 家 の
涼しさや 浮 御 去 うへの 去 てくら
夕きみ 去 ひ 去 ぬき 去 に 去 ぬ 去 り
二日 月の 法 去 そ 去 む 去 ひ 去 ま
歌しら 去
楊や 宮 去 れの 去 ひ 去 り と ろ
熱斗 去 や 盛 茶 去 き 去 ぬ 去 ま
世 去 中や 去 貧 去 の 去 け 去 し 去 法 去
なか女に 去 う 去 て 去 く 去 る 茶 役 去
秋の歌
名月
四月や 去 ひ 去 て 去 も 去 花 去 の 去 歌 去 一 去 よ 去 さ
名月や 去 椋 去 り 去 ま 去 ひ 去 秋 去 の 去 虚 去

椋 芝 智月 九峰 去 林 里 波 茶 堂 移 原 正 秀 里 東 蕉 堂 側 茶 去 林



みそぐら
二句 去 去る せん せく 去 ひる 二句 去 し 苗り 二句 去 句中みそも
二句 去 去紀 一 去を 去る 茶なり 去 な 去 海 一 去 近 去 近 去 る 去 と
去 一 面 去 はつて 去 る なり 去 で な く 去 る 一 去 の 去 粉 去 く 去 し 去 な 去 海
去 に ぬ き 一 面 去 はつて 去 る なり 去 で な く 去 る 一 去 の 去 粉 去 く 去 し 去 な 去 海
去 し か で 一 去 の 去 な 去 り 去 侍 士 去 発 去 と 去 ひ 去 さ 去 ろ 去 と 一 去 を 去 の 去 ま 去 り 去 方 去 と 去 ひ 去 さ 去 紀 一
ひ と の 日 一 去 月 去 七 去 日 去 人 去 日 去 と 去 あ 去 き 去 ま 一 去 お 去 し 去 祝 去 と 去 ひ 去 さ 去 紀 一

めり き せ 去 一 去 月 去 な 去 さ 去 孫 去 る 去 め が る 時 一 去 み と 云
詞 二句 去 を 去 ミ 去 ホ 去 み そ ぐ ら 一 去 幣 去 を 去 こ 去 ッ ク か 去 七句 去
ほ ら め け ふ し ら る く ぬ ら ん 去 此 去 こ 去 か 去 七句 去 し て
二句 去 し 苗り 二句 去 句中みそも
去 な し 海 一 去 近 去 近 去 る 去 と
去 で な く 去 る 一 去 の 去 粉 去 く 去 し 去 な 去 海
ひ と の 日 一 去 月 去 七 去 日 去 人 去 日 去 と 去 あ 去 き 去 ま 一 去 お 去 し 去 祝 去 と 去 ひ 去 さ 去 紀 一

荷芋　酒盃　里芋　利休　蓮

芭蕉　利休　鉢巻

大津　智恵　大竹　嵯峨　為め　孤屋

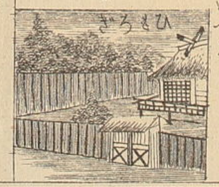
ゑんじ　みねのしたゝり　なり　懸と云

せし　二句去　せりと　なるこして　二句去　せれ　一夫のるを　ふなり　せ

らん　七句去　留りハ　ハ　せなり　ハ　せる　二句去

せく　しく　せし　二句　らがひよ　せ　二句去　ふのぬ　ハ　ぬ

せらと　ふ　同　七句去　留りハ　ハ　せぐて　一　あるまるを　ふなり



ひめろき　一　沖の江を　なり　懸と云　えてふる　一　ひて　そらへ

もれし　七句去　留りハ　ハ　れし　ハ　りせと云

同　一　ハ　ゆせ　道　ゆせ　あへ　り　れ　第　一　第のあとを　ふなり　り

せらき　七句去　留りハ　ハ　せらる　ハ　り

せる　二句去　せれ　一　夫のるを　ふなり　せ

せる　ハ　り　せる　二句去

ふのぬ　ハ　ぬ　齒

せし　一　ぎんどゝ　吟　せさひ　二　慰て　七句　発去　せさ

めば　せさみぬ　ふく　に　ゆ

一又字　七句去　刑者　七句去　刑者　七句去　草　編　獨

百千万　者　ハ　去　刑者　ハ　り　又句去　刑者　ハ　り　ハ　去　字　季　モ　又句去　ぼ　季

百千万　者　ハ　

稲る故 又秋より初めて稲るといふなり 稲る菓 秋 九月十日のきくをいふ

稲異 秋 初雪稲る 冷雪稲る 雪の稲る 皆冬なり 歌 寄和歌の分 連歌 俳諧

風雅 愛語の句 者西去 待 花句 短冊 色紙 小

うゑ 田うゑ 俗語の句 者西去 伊勢の国 以せ暦

以せ海老 いせ鯉 いせ海鼠 以せ貝 以せ

鯉せい

きり鉢 かやうの類出ぶちにうちべしと云 格式六十六ヶ国者同断なり 東西

南小比丘 秀句一者一 打 俗 分角ゑんまの付ても 打 城ても不惜

丈草 酒雪 荷兮 利合 支考 小枝 俗依こ 宝角

宝角 枕海 芭蕉 支梁 鉢岸

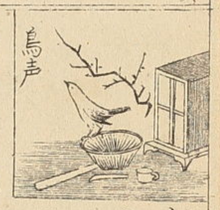
刈萱 麦出 浦の雲ふむ出 相真 沙香 梵ふ 初雪 伊出 黄はとくまる小家 初雪 風や 鶏の毛立 基所 八束 附雨

芋掘の板つくしろ 初附雨 黒ろ 沖の附雨出りしろ 荊口 丈茶

大根引 ふるを 鶏 白ふる小汚主茶るや大根引 芭蕉 鶏 酒雪

鉢巻をしめて出る 大根おき 水送 ふるさる 青の 上 大根 雪

もろ雪 よとろを教てもしへり 初雪の見 やるの菜 しら もつ雪や 梅の 蕾の 蕾のうへ 鶏 利牛 買山



鳥声

雪の雪ト〳〵 七句 者西去 雪の雪 ホ之 鳴も 雪も

日陽 雪の雪ト〳〵 鳴も 雪も 雪の式 日陽 雪一

雪迄一 雪犬一 者西去 雪の菜 行雪 泊り

荒雪 白尾 表 毛とろぶる 羽毛ふる 又 小雪 初雪

山別出 秋 雪の雪屋 歌と雪 雪の出雪 みぞ

いろは雪 手介 於菜 行

表 よの

○表の歌

大和 摂州 天かく山 和歌 近江 行原 大和 ひらな 志賀 近江

[illegible]

[illegible]

[illegible]

組文の手仕事を稲と蔵まきの人
つくづくとまい先き出張を仕
下来い宇治の楽みさしくれて
坊主の巻くる茶いせものしき
色紙はよりして有るハツ切り
此加人 長雷 礼の 針
田社 時はよ 苗 把て 投て 豆
芝者社 む 稲 豆 乃 黄
り 性の 出 しさの 仕 を 鈴
教 よ も 社 く く ね の 自
鈴 姫 は 蝕 の さ わ る い ら く く く
宮 社 し く る 花 な の る
せ 之 の 梅 は 桂 の 巻 り み ち
む の し 社 る ま り 志 の せ せ そ 歪
ま き ん 法 な き 歪 の つ り ひ 色

孤屋
日
孤屋
日
宇角
孤屋
宇角
孤屋
宇角
孤屋

神無月廿日除門なる所にて

芭蕉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風やみて杜の路の風さやう
輕の雪子は袋をのうへる
ちらちらくと朱の物の物のり変
目黒まつ杜つまのねちこやく
水こも加も葉の三角中はか
備前のちりをちらす素風

利牛
孤屋
芭蕉
雪渡
孤屋
利牛

雪の松をれにこれの尚をし
日を出るまへの赤きを
下着を一つ脱に出て
ふりくくとちらく大名の供
分はるる風もをり蕭寂
栗をうまくのうきし富地
然ぬ杜焼きれたる秋よ
実おしらくて輕茶うる

移風
孤屋
芭蕉
子珊
水園
石菊
移風
雪渡
利牛
袋水
雪渡

心之事森所もふつ戸孤
るの若物のきそる千も杜
年の皮雪踏よ野人る変の赤て
稲まるのさは雨杜もらく
子葉もあくのうもえ変海の秋
ふくくにねて杜をやる面白
雪こ杜自をかまちそ猿大工
背中へ杜ある児をうの海にある
業却ふるきつて上に葉蔵て
川ふくくにて帖ふくを杜
物ふくくを雪時まき雑の部
春戸へ回まの山一りみち
も杜物ふの花蝉くと親うを雲
取集ふてい杜赤き精進日
隙来を掃て佛へたのう色

時雨
白川関
霰
花山
小豆
笹蒔
須广
奈良
笠取
小田原
三瑞
三室
玉川
佐吉
志賀
雪
三田川
芦屋
男山
大内山
三笠山
水尾
千鳥
大原
小田原
佐吉
松尾
幸崎
玉川
三田川
谷上川
大井川
白川
佐吉
芭蕉
三室嵐
係史
水鳥
三尺深
渡川
丹波
須广
三宿
鴨
泉川
初瀬川
丹生川
三田川
炭窯
小塩山
小豆
大さら

行狩猟案内終

○芭蕉翁口授

冬の日暮山の
春の日いさうじく賦
夏の川雨の降つぢたか
秋の風の夕にさむし
冬の海の夕にうまし
雲の形の夕にふべは向る
雪の形の夕にさむし
春の月の夕にかすむ
夏の雲の夕に山ふの
秋の月の夕にあるもの
冬の海の夕にたつもの
門の春の夕にあるべし
海の春の夕にあるべし
俳諧聖の変なるべし
上弦の七日八日の内

芭蕉翁 誂諧七部集終

掌中侃諧季寄便覽終

明治十三年十月十九日出版御届
同十四年一月出版

定價金三十五錢

編輯人 東京神田區皆川町五番地 谷壮太郎
出版人 同日本橋區通四丁目十番地 東京府平民 松田幸助

東京發賣書肆人
芝三島町 山中市兵衛
京橋銀座二丁目 山中孝之助
同銀座四丁目 山中北郎

東京發賣書肆人
日本橋區本石町二丁目 江嶌喜兵衛
京橋區南傳馬町二丁目 村上真助
芝區露月町 覺張榮三郎

東京書肆

日橋區通一丁目　須原屋茂兵衛
同　一丁目　大倉孫兵衛
同　二丁目　稲田佐兵衛
同　二丁目　同　源吉
同　二丁目　小林新兵衛
同　三丁目　若林喜兵衛
同　三丁目　長野亀七
同　四丁目　江藤喜兵衛
同　四丁目　野口愛
同　四丁目　金花堂佐助
同　南傳馬町一丁目　堀口惣兵衛
同　同　二丁目　小林新造
日本區　本町　中外堂両店
同　本町　岡田文助
同　通塩町　内藤傳右エ門

東京書肆

日橋區馬喰町三丁目　森屋治兵衛
同　二丁目　荒川藤兵衛
同　通油町　水野慶次郎
同　横山町　出雲寺萬次郎
同　大傳馬町二丁目　東生亀次郎
浅草區南松山町　高橋平三郎
日本橋區本石町四丁目　中山勝次郎
京橋南傳馬町一丁目　吉川半七
同　一丁目　慶雲堂書店
同　一丁目　深澤堅三
日橋區　通四丁目　松山堂書店
京橋區　桶町　東崖堂書店
同　桶町　中村熊次郎
芝區　日蔭町　二三屋三二
同　飯倉　山口佐七

東京書肆

芝　神明前　和泉屋吉兵衛
日本橋區　横山町　内田弥兵衛
浅草区　茅町　須原屋伊八
同　須賀町　松寄半造
同　同町　瀬山直次郎
日本橋區新大坂町　鶴屋吉右エ門
本郷區湯島松住町　別所平七
麹町區麹町四丁目　磯部太郎兵衛
芝　飯倉　萬屋忠兵衛
神田　佐柄木町　大塲助一
上野　仲町　岡村生助
神田　裏神保町　大石良造
同　小川町九番地　奥吉五郎
横濱之町三丁目　田澤多一郎
同　中堀淺次郎